埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第12集

県営都幾川明覚団地関係

埋蔵文化財発掘調査報告

衆生（しゅじょう）ケ谷戸（やと）

1982

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

近年、首都圏に属する埼玉県では各種開発事業が進行し、それに伴う文化財保護との調整件数は激増の一途をたどり、やむを得ず記録保存のため発掘調査を実施しなければならないものが増加しています。

特に、県内の国鉄・私鉄沿線は、大小の宅地開発事業が集中し、発掘調査が急増している地域であります。

この都幾川村においても例外ではなく、県営の団地が建設されることになりました。事前に、県営住宅課と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむなく発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずる運びとなりました。

本書は、県営都幾川明覚団地建設に伴う衆生ヶ谷戸遺跡の調査報告書であります。

自然景観に恵まれたこの都幾川村において、古代人の足跡を一端とはいえ、明らかにし得たことは、現代に住む我々にとって、共通の貴重な財産となっていくものでありましょう。

本書刊行に当たり多くの方々から種々の御協力、御指導をいただきました。ここに、県営住宅課、都幾川村教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　長　井　五　郎

例　言

1. 本書は、県営都幾川明覚団地建設にかかる衆生ヶ谷戸遺跡の発掘調査（昭和56年10月22日委保第５の2079号）報告書で、遺跡は、比企郡都幾川村番匠字菱沼208—1他に所在する。遺跡原点（グリッドF—4）は、公共産標 x＋108.209, y－48144.806で、海抜高度78.430mである。
2. 発掘調査は、埼玉県教育委員会が調整し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が埼玉県から受託し、実施した。尚、発掘調査の組織は２ページに示したとおりである。
3. 発掘調査は、金子直行、富田和夫が担当し、昭和56年10月26日～同年12月12日に亘って実施した。
4. 出土遺物の整理は、金子があたり、富田和夫、樋口誠司、大窪記世美，柳原さよ子の協力があった。
5. 本書の報筆は金子が行なったが、金子以外の部分については文末に記した。
6. 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第四課の職員があたり、横川好富が監修した。
7. 本書作成にあたり、以下の方々から御指導、御助言をいただいた。（五十音順敬称略）石岡憲雄、梅沢太久夫、岡野吉男、金子真土

目　次

序
例　言
Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
Ⅲ　遺跡の概観と調査の方法……6
Ⅳ　調査の経過……9
Ⅴ　遺構と遺物……10
1.　住居跡と遺物……10
(1)　縄文時代の住居跡と遺物……10
2.　土壙と遺物……12
(1)　古墳時代の土壙と遺物……12
(2)　各時期の土壙……13
3.　井戸跡……19
4.　溝跡及びその他の遺構……19
5.　グリッド出土遺物……20
(1)　土　　器……20
(2)　石　　器……26
Ⅵ　考　察……30

付　載
Ⅰ　衆生ケ谷戸遺跡近隣の遺跡……41
1.　遺跡の概要……41
2.　出土遺物……41
(1)　浜野氏所蔵遺物……41
(2)　原遺跡出土土器……43
Ⅱ　考　察……55

挿　図　目　次

第１図　衆生ヶ谷戸遺跡と周辺の遺跡…… 4
第２図　遺跡周辺地形図…… 6
第３図　グリッド配置図…… 6
第４図　地層断面図…… 7
第５図　調査区全体図…… 8
第６図　第１号住居跡……10
第７図　第１号住居跡炉平面・断面図……11
第８図　第１号住居跡炉埋設土器……11
第９図　第１号住居跡出土遺物(1)……11
第10図　第１号住居跡出土遺物(2)……11
第11図　第１号土壙……12
第12図　第１号土壙出土遺物……13
第13図　各時期土壙平面・断面図(1)……14
第14図　各時期土壙平面・断面図(2)……16
第15図　各時期土壙平面・断面図(3)……18
第16図　井戸平面・断面図……19
第17図　グリッド出土土器(1)……21
第18図　グリッド出土土器(2)……22
第19図　グリッド出土土器(3)……24
第20図　グリッド出土石器……26
第21図　原遺跡周辺地形図……40
第22図　浜野氏所蔵土器実測図……42
第23図　原遺跡出土土器実測図……42
第24図　原遺跡出土土器拓影図……42
第25図　原遺跡出土土器(1)……44
第26図　原遺跡出土土器(2)……45
第27図　原遺跡出土土器(3)……46
第28図　原遺跡出土土器(4)……48
第29図　原遺跡出土土器(5)……50
第30図　浜野氏所蔵土器展開模式図……58

表　目　次

表１　都幾川村周辺の遺跡地名表……5
表２　第１号住居跡ピット計測表……11
表３　第２号土壙出土土器観察表……13
表４　グリッド出土土器観察表……28
表５　原遺跡出土土器観察表……53

図　版　目　次

図版１　（上）　明覚地区の遠景
　　（下）　発掘風景
図版２　（上）　第１号住居跡全景
　　（下）　第１号住居跡炉
図版３　（上）　第１号住居跡完掘状況
　　（下）　第１号溝
図版４　第２号溝（東から）
図版５　第２号溝（西から）
図版６　（上）　第１号土壙
　　（下）　第１号土壙断面
図版７　（上）　第１号土壙遺物出土状況(1)
　　（下）　第１号土壙遺物出土状況(2)
図版８　（上）　第３号土壙
　　（下）　第４・５号土壙
図版９　（上）　第７号土壙
　　（下）　第９号土壙
図版10　（上）　第10号土壙
　　（下）　第11号土壙
図版11　（上）　第12号土壙
　　（下）　第13号土壙
図版12　（上）　第14号土壙
　　（下）　第15号土壙
図版13　（上）　第16・17号土壙
　　（下）　第18・19号土壙、第２号溝
図版14　（上）　第22号土壙
　　（下）　第24・25号土壙
図版15　（上）　第１号井戸
　　（下）　第２号井戸
図版16　（上）　Ｆ―３区、第４号溝周辺
　　（下）　調査終了全景
図版17　（上）　第１号住居跡炉埋設土器
　　（下）　グリッド出土石器及び耳飾り
図版18　第１号土壙出土土器
図版19　（上）　グリッド出土土器（１～21）
　　（下）　グリッド出土土器（22～38）
図版20　（上）　グリッド出土土器（39～61）
　　（下）　グリッド出土土器（62～69）
　　原遺跡出土土器（右）
図版21　（上）　グリッド出土石器
　　（下）　第１号住居跡出土石器
図版22　浜野勇氏所蔵土器(1)
図版23　浜野勇氏所蔵土器(2)
図版24　浜野勇氏所蔵土器(3)
図版25　原遺跡出土土器(1)
図版26　原遺跡出土土器(2)
図版27　原遺跡出土土器(3)
図版28　原遺跡出土土器(4)
図版29　原遺跡出土土器(5)

Ⅰ　調査に至る経過

埼玉県のほぼ中央部に位置する都幾川村では、これまで31ヶ所の遺跡が確認されている。今回調査を実施した衆生ヶ谷戸遺跡は、玉川村にも及んでおり、都幾川村では最東端の遺跡である。

この遺跡内に県営都幾川明覚団地の建設が始まったのは昭和56年４月のことであった。県教育局文化財保護課にこの情報が伝わった時には、すでに一部基礎工事が実施されていた。文化財保護課は、即刻、県住宅都市部県営住宅課に工事中止を申し入れ、保存方法等についての協議を始めた。しかし、一部とはいえ工事にかかってしまい、県営住宅課でも建設用地の変更は不可能ということであったので、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

文化財保護課では、開発事業と埋蔵文化財保護との調整を図るため、年数回、国・公団・公社・県の関係部局と事前協議を実施している。しかし、これまで県営住宅課関係の調査がなかったため、事前協議の対象となっていなかった。同じ県の事業でありながら調整が不充分であったことについては、大いに反省させられ、昭和56年度からは、県営住宅課を含め、数課所を事前協議の対象として追加した。

さて、発掘調査については、数度の打ち合せの結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することになり、６月４日には遺跡の規模・性格等を確認するため、都幾川村教育委員会も立ち合って試掘を行った。この結果、平安時代の集落跡が確認され、12.00㎡程の面積が調査可能であることも判明した。これを基にして、改めて発掘調査実施についての協議に入り、昭和56年９月９日付け県住第805号をもって、県営住宅課長から文化財保護課長あてに「55県住都幾川明覚団地建設区域内における埋蔵文化財発掘調査について」という協議書が提出された。その協議の内容は、次のとおりである。

1　調査時期及び範囲
2　調査費用
3　調査機関

文化財保護課では、これを受けて、昭和56年９月17日付け教文第665号をもって県営住宅課へ回答し、調査機関である事業団へは、調査実施についての文書を送付し、ここに発掘調査の準備は整ったのである。

文化財保護法第57条の３の規定に基づき、埼玉県知事から文化庁長官あてに、埋蔵文化財発掘通知が提出され、事業団理事長からは、同法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出された。かくして、昭和56年10月15日から発掘調査は開始された。

文化庁からは、昭和56年10月22日付け委保第５の2079号をもって、発掘調査届を受理した旨の通知があった。

（井上尚明）

発掘調査の組織

1. 主　体　者　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	長井五郎
副理事長	沼尻和也
常務理事	渡辺澄夫

2. 庶務経理　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長	伊藤悦光
	関野栄一
	福田　浩
	本庄朗人

3. 発掘及び整理　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長	横川好富
調査研究部第四課長	増田逸朗
調査研究部第三課長	谷井　彪
	金子直行
	富田和夫

4. 協　力　者　比企郡都幾川村教育委員会
都幾川考古学研究会
地元区長及び地元住民

Ⅱ　遺跡の立地と環境

衆生ヶ谷戸遺跡の行政上の位置は、埼玉県比企郡都幾川村番匠字菱沼208—1他であり、北緯35°59′59″、東緯139°17′58″に当る。

埼玉県は、関東地方に於いても中央部から西部にかけて位置する。北は利根川を境に群馬県、茨城県の一部に接し、広大にして肥沃な平野が形成される。西境は秩父山地により長野県、山梨県と接し、ここを源とする荒川が中央部から西部を縦断して武蔵町台地と大宮台地を分断しながら沖積地を形成しつつ東京湾へと流れ込む。地形的には、西方に聳える奥秩父連峰から連なる丘陵部が、山地際で南北に帯状に広がり、中央部から南部にかけての台地部に漸次移行し、更に荒川等の河川によって形成された低地部へと移り変わる。しかし、長き時代に亘り利根川、荒川等の大小河川は流路を変え、実際のところ複雑な地形を呈するわけであるが、大まかに言って西が高く東が低くなる傾向にあると言えよう。

さて、都幾川村であるが、概ね西部から中央部にかけて広がる比企丘陵の山地際の一画に位置する。堂平山を源とする都幾川が村の中央部を東西に蛇行しながら貫流する。都幾川は、玉川村で雀川、嵐山町で槻川と合流し、川島町で高麗川と合流して越辺川となり、更に入間川と合流してやがて本流である荒川へと流れ込む。

都幾川村は、この河川の左右岸の山合に開けた平担地に集落・畑が散在し、山地部では800m級の山々に囲まれて集落が点在する人口約7200人程の山村である。集落は、明覚、平、大椚の概ね三地区に分かれ、この内で東端の明覚地区に国鉄八高線明覚駅がある。八高線は、越生町、鳩山村を北進し、都幾川村でやや北東に進路を変え、緩やかな丘陵、河岸段丘上を通り、都幾川や馬の背状の丘陵を迂回する形で玉川領に入って大きく屈曲しながら雀川沿いに小川方面へと北進する。

衆生ヶ谷戸遺跡は、この明覚駅から東へ直線距離で約600mの所に位置し、遺跡の半分は玉川村に及ぶ。遺跡は、八つ手状に小さく複雑に開析した谷間の河岸段丘上に移行する北面に開けた裾の部分に立地する。西方には秩父山地、眼下に河岸段丘、対岸には愛宕山が見渡せ、四季の移り変りが美しい風光明媚な場所である。

都幾川村の遺跡は、都幾川及びそれに流れ込む小川によって開析された河岸段丘上に立地することを特徴とする。右岸と左岸の丘陵から河岸段丘上へ移行する部分に遺跡が立地し、大きな遺跡は右岸に片寄って存在することが窺われる。他には山地部の山合いに小さな遺跡が点在する。

都幾川村内では、縄文時代と思われる遺跡が25箇所確認されているが、多くは明覚地区に集中している。その時期別内訳は、早期3、前期8、中期25、後期1、晩期1であり、山地部では早期の遺跡が多く、段丘上では中期の遺跡が圧倒的に多い。

他に、平安時代の須恵器の破片が散布する地点が4箇所存在するが、その内1箇所は大字西平字野中に位置する多武峯瓦塔遺跡であり、墓地である。衆生ヶ谷戸遺跡でも須恵器片が多数散布し、付近の窯跡との関連が期待されたが、今回の調査では、それらしい遺構、遺物は検出されなかった。

また、今回の調査で和泉期の土壙と土器が検出されたが、今まで都幾川村内での出土例はなく、

第1図　衆生ヶ谷戸遺跡と周辺の遺跡

貴重な検出例であり、今後、古墳時代の遺跡の発見される可能性が高くなった。今後の調査に期待したい。

上述した様に都幾川村は比較的遺跡数が多いが調査例は少なく、今までに八幡遺跡と江光山遺跡の二例のみである。

ここで、江光山遺跡例を踏まえて周囲の縄文時代中期の遺跡群をみると、台遺跡(№.5)、原遺跡(№.2)、衆生ヶ谷戸遺跡(№.1)、愛宕山遺跡(№.7)、美根遺跡(№.9)等が比較的近隣に位置する。この中で、原遺跡からは中期末の深鉢2個体(後述する)が、美根遺跡からは曾利Ⅲ式土器と連弧文土器が、いずれも耕作中に検出されている。ここに衆生ヶ谷戸遺跡の調査例が加わるに至って、資料数は少ないが朧げながらにも、都幾川村明覚地区の縄文時代中期の様相が浮き彫りにされてきたと言えよう。しかし、未だ不明な点が多く、縄文時代中期中葉の勝坂式土器を出土する遺跡は少なく、都幾川左岸の川久保遺跡(№.6)、沢口遺跡(№.13)、白粉山遺跡(№.15)や、右岸の江光山遺跡があるだけで、殆どが調査されていないものであり、衆生ヶ谷戸遺跡と比較検討するのには不充分であると言わざるを得ない。

参考文献

埼玉県教育委員会「埼玉県遺跡地図」1975
梅沢太久夫「八幡遺跡」都幾川村文化財調査報告書　1978
梅沢太久夫「江光山」1980

遺　跡　地　名　表

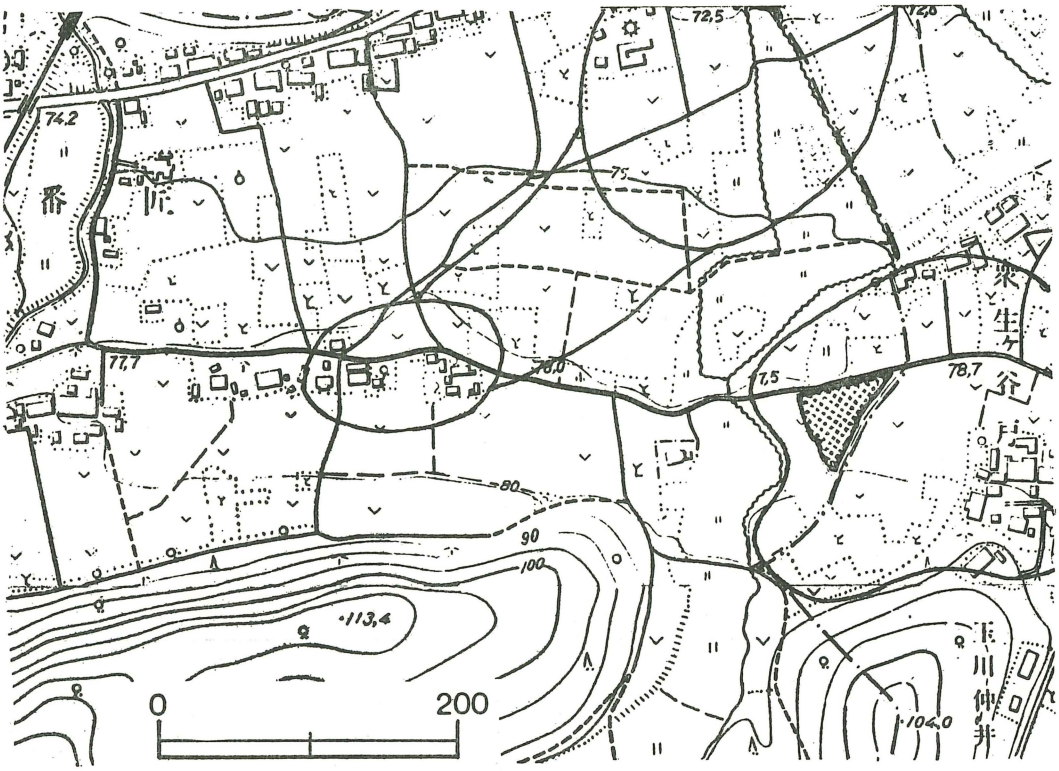
都幾川村

1. 衆生ヶ谷戸(加曽利E、和泉、須恵)
2. 原(加曽利E)
3. 門林(諸磯)
4. 江光山(茅山、黒浜、諸磯、加曽利E、称名寺、掘之内)
5. 大台(加曽利E)
6. 川久保(勝坂)
7. 愛宕山(縄文中期)
8. 縄文土器散布地
9. 美根(加曽利E)
10. 八幡(夏島、田戸、茅山、黒浜、加曽利E)
11. 於根(加曽利E)
12. 螺向(加曽利E)
13. 沢口(勝坂、加曽利E)
14. 白粉山下(縄文、須恵)
15. 白粉山(勝坂、加曽利E)
16. 田中(安行)

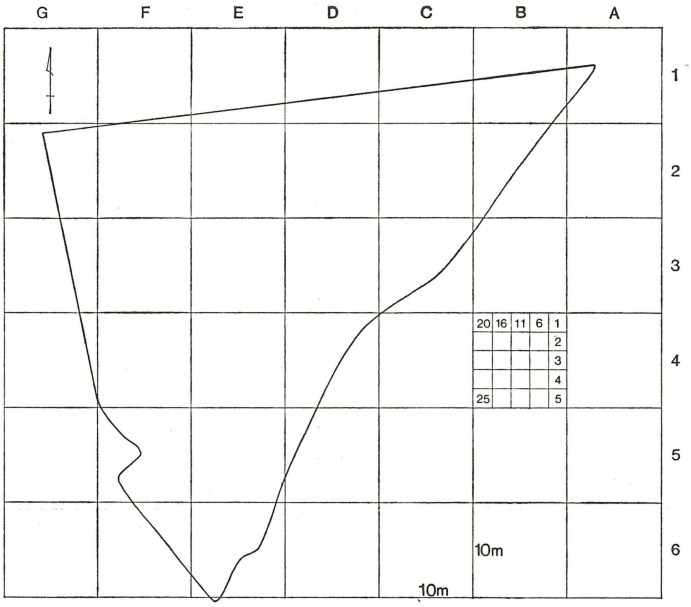
玉川村

17. 篩新田(窯跡)
18. 亀の原(窯跡)
19. 伊勢の台(勝坂、加曽利E)
20. 王川原(勝坂、加曽利E)
21. 地家(勝坂、加曽利E)
22. 散布地
23. 後久保(加曽利B)
24. 散布地
25. 散布地
26. 明王院裏(加曽利E)
27. 中野(諸磯、加曽利E)
28. 中野原(黒浜、加曽利E)
29. 小山(縄文早期、中期)
30. 岩鼻(加曽利E)
31. 官能(加曽利E)
32. 栗ヶ谷戸　№.1
33. 栗ヶ谷戸　№.2
34. 栗ヶ谷戸　№.3
35. 高野(黒浜、諸磯)
36. 根際(加曽利E)
37. 仲井(加曽利E)

Ⅲ　遺跡の概観と調査の方法



第２図　遺跡周辺地形図



第３図　グリッド配置図

衆生ヶ谷戸遺跡が開析された谷間から河岸段丘面へ移行する丘陵の裾の部分に立地することは先述したが、詳細に表面採集を行ったところ、遺跡の範囲が概ね確認された。採集された遺物は、平安時代の須恵器細片が多く、縄文式土器は少量であった。それによると、調査区の南、山裾（現在はカッティングされ、墓地等が形成されている）の栗畑から、西は谷頭より流れ出る小川を境に東側、北は河岸段丘の境まで、遺物が散布している。散布密度の濃い地点は、調査南東部の畑地であり、町道より北側に移るにつれて稀薄になる。今回の調査区は、現在小川が流れている小谷方向に、ローム面が緩く傾斜する台地の肩部にあたると言えよう。

調査区の自然堆積土層は、第４図に示したが、北方向に緩く傾斜する。表土は浅く、約15～20㎝下で粘性の強いローム面が露呈し、この面を境に水が湧き出してくる。２層以上は粘性が強く緻密な層が続き、９層下は小礫層になる。

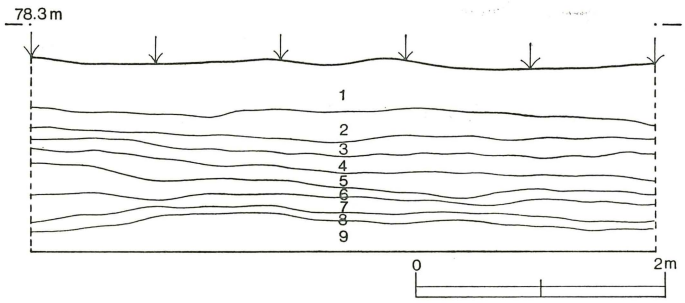
当初、調査区内にも須恵器が散布し、試掘を行った際に遺構状の黒褐色の落ち込みが確認され、国分期の住居跡の存在が予想された。しかし、表土除去を進行するにつれて、黒い落ち込みは土壙であり、住居跡状のものは台地傾斜部に堆積した遺物包含層であることが判明した。

調査区内には、既に団地が建設された際の工事に伴って、表土がローム面付近まで削平、又は破砕礫が敷かれていたため，もとより浅い表土に加えて、攪乱が進行し、住居跡部分の覆土は存在しなかった。地形的には、調査区Ｆ～Ｇ—３～４区にかけて漸次緩やかに傾斜し、Ｅ—６区とＧ—３区の比高差は約１ｍを測る。遺構の多くは台地の上部、同等高線上に並ぶ傾向を示すが、傾斜部にも構築されている。

溝はＡ—１区から南西方向と、調査区中央部で東西方向に位置する。更に、この溝を境に南北に隣接して井戸が２基存在する。

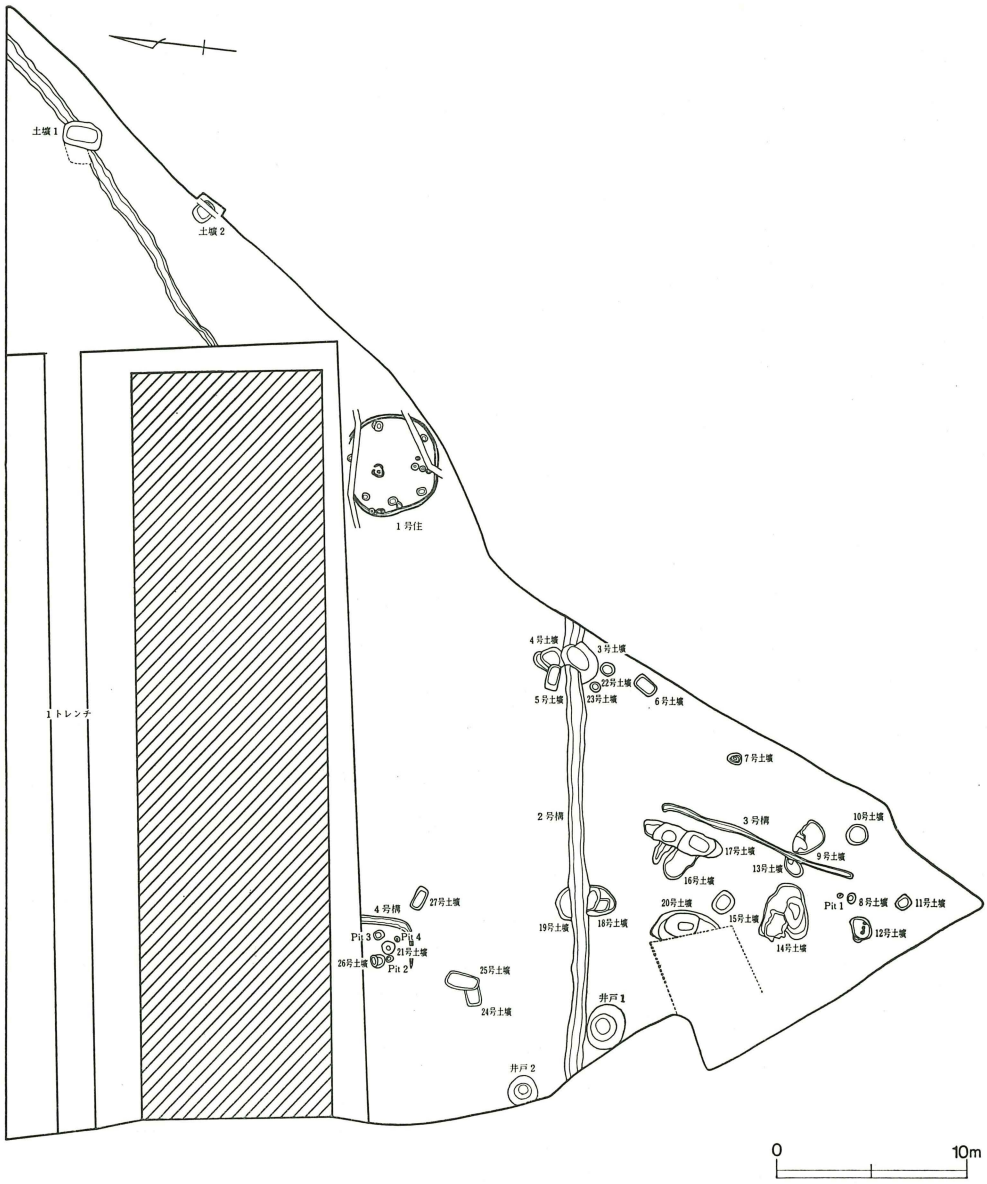
最終的に検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡１軒、古墳時代前期の土壙１基、時期不詳の土壙27基、井戸２基、溝４本、他にピット状のもの４個であった。出土遺物は、コンテナ箱にして５箱程である。

調査の方法としてはグリッド方式を採用した。磁北にグリッドの南北軸を合わせ、調査区内に任意に10ｍグリッドを設定し（第３図）、その内部を更に北東杭を基準として25分割し、２ｍの小グリッドを設定した。調査は全てこの小グリッドを基準にして行なった。



1．黒褐色土（耕作土）
2．やや黄味を帯びた灰白色
3．淡橙褐色土
4．灰白色土
5．暗灰白色土
6．橙褐色土
7．暗灰白色土
8．淡橙褐色土
9．灰白色土
2～9．粘性、しまり共に強い

第４図　地層断面図


土壙1
土壙2
1号住
1トレンチ
4号土壙
3号土壙
22号土壙
5号土壙
23号土壙
6号土壙
7号土壙
2号溝
3号溝
10号土壙
17号土壙
9号土壙
13号土壙
16号土壙
27号土壙
4号溝
Pit 3
Pit 4
21号土壙
26号土壙
Pit 2
25号土壙
24号土壙
19号土壙
18号土壙
20号土壙
15号土壙
14号土壙
Pit 1
8号土壙
11号土壙
12号土壙
井戸1
井戸2
0
10m

第5図　調査区全体図

Ⅳ　調査の経過

本調査は、昭和56年10月26日から開始され、同年12月12日埋め戻しが完了した時点で、全て終了した。以下、調査の進行状況を簡単にまとめることにする。

10月26日～30日　発掘機材を搬入し、全て調査準備を整えて、C—3区建物南側から機械により表土除去作業を開始する。調査区内の表土は薄く、約20㎝下でローム面に移行するが、この面を境に水が湧き出るため、表土除去と同時進行して排水用の溝を調査区に沿って巡らす。表土除去後遺構確認を行う。その結果、住居跡1軒、溝3本、土壙多数が確認された。その後、建物北側の東西に細長い調査区の中央部に、1.5m幅のトレンチを入れて確認作業を行う。遺構の検出はなく、北西方向に向って緩くローム面が傾斜していることが確認された。

11月2日～6日　2日と6日が雨にたたられ、思った様に調査が進行しない。調査区北東部の第1号溝から掘り進める。湧水激しく掘り下げを断念して、排水溝を表面下50㎝位まで再掘削する。水中ポンプも3台に増やして、昼夜分かたず排水に供する。

11月9日～13日　第1号溝を掘り下げるが、B—1区付近の溝の底と壁際に壺と甕が出土、その部分は溝のラインが崩れるため、再度確認作業に入ったところ、土壙であることが判明した。その後底面まで掘り進み、土層断面図、平面図、エレベーション図を作成し、完掘後遺構全体写真を撮影する。他に、第2号溝と第1号～5号土壙を掘り始める。

11月16日～20日　北東部の三角形状の調査区内にある遺構を完掘し、全景写真を撮影する。その後、1mのメッシュを組み、全測図を作成し、レベリングまで完了させる。第1号住居跡は、既に床面が露呈しているため、床面を精査し、炉、柱穴、周溝のプランを明確にして掘り始める。個々のピットの土層図を形成し、炉を半截する。炉は石囲い炉で、中央に炉体土器が埋設されているため土層図を作成し、写真を撮影する。その後、全測図、エレベーション図、レベリングを完了した時点で清掃し、全体写真を撮る。他に第1号～15号土壙と第2号溝を掘り進め、第3、4号土壙、第2号溝との切り合い部分で土層図を作成する。第2号溝が一番新しいことが判明する。他の土壙も個々に土層図をとり、完掘した後写真撮影を行う。

11月24日～27日　第1号住の炉体土器を取りあげ、排水溝より外側の部分を拡張して掘りあげ、もう一度全体写真を撮影して、住居跡についてはすべて調査を完了させる。F～G—3～4区の傾斜部をローム面まで掘り下げた結果、埋没谷の存在が明らかになった。その後、土壙数基と溝を確認し掘り始める。第2号溝西端の南北に位置する土壙は井戸と判明し、土層図作成後に写真撮影を行なった。同時に、調査区の全測図を東側部分から作成し始めた。

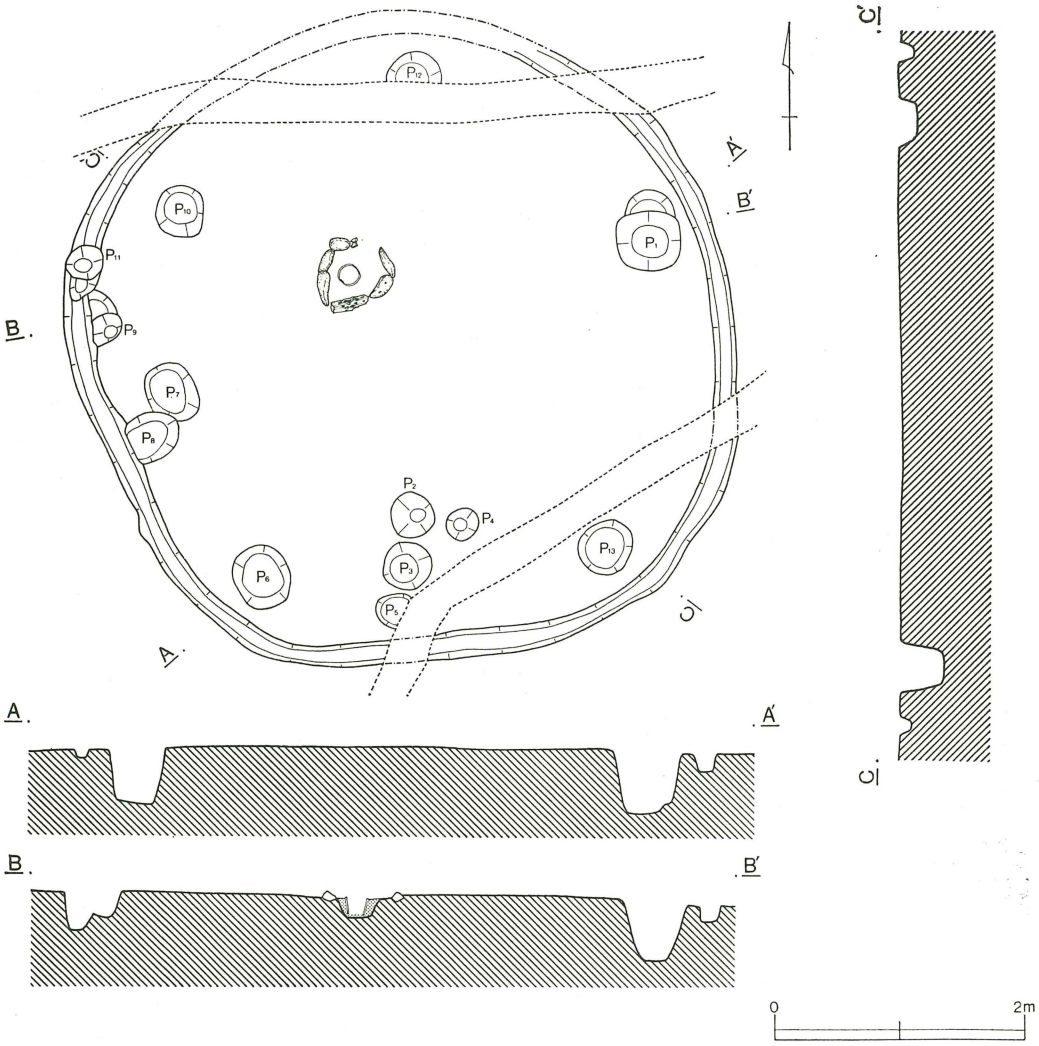
11月30日～12月4日　調査区の全測図作成を進め、12月4日にレベリングを終了した。

12月8日　航空撮影を含む全景写真の撮影を行なった。また、E—6区調査区際に於いて、基本土層確認のための深掘りを行ない、土層図を作成後、現場での作業を終了した。

12月9日～12日　11日から遺跡の埋め戻しを始め、12日にすべての調査を終了した。

V　遺構と遺物

1.　住居跡と遺物

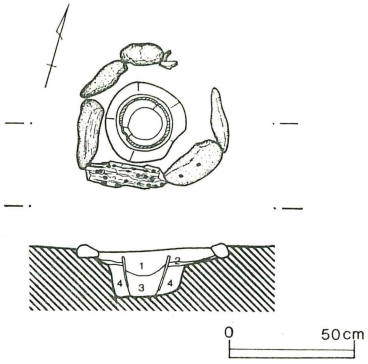


第6図　第1号住居跡

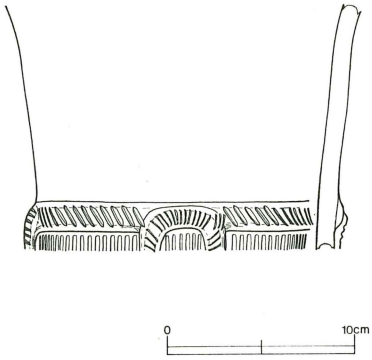
(1)　縄文時代の住居跡

第1号住居跡（第6図）

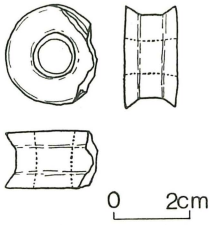
本調査で唯一検出された住居跡であり、C～D—3区に位置する。建物と調査区の間に狭まった三角形の地点に辛じて1軒分を検出することができた。しかし、住居跡の北壁の一部は建物建築の



第７図　第１号住居跡炉平面・断面図

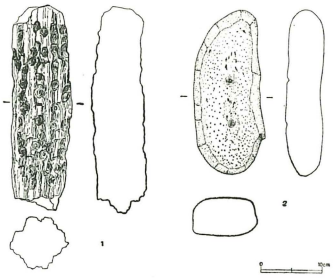


第８図　第１号住居跡炉埋設土器



第９図　第１号住居跡出土遺物(1)

1．褐色土、焼土粒子を少量含む
2．黄褐色土・焼土小ブロックを含む
3．暗褐色土
4．黒褐色土



第10図　第１号住居跡出土遺物(2)

際基礎工事により破壊されていた。更に、調査区の排水のため予め掘った溝によって、住居跡の北側と南側に２本の帯状の攪乱部を作ってしまった。

平面プランは、住居跡西側の壁がやや直線的な楕円形を呈し、長径約5.3m、短径5.1mを測る。

炉は長軸上中央部やや北側よりに位置し、大小７個の細長い石によって囲まれているが、北東部の石が欠損する。石囲いには窪み石が２個使用され、更に石囲いされたほぼ中央部には、口縁部と底部を欠損する土器が埋没されていた。

柱穴は全体で13個検出された。主柱穴として使用されたものは５～６個であると思われる。床面は中央部が僅かに窪むが、ほぼ平担である。周溝は、幅20cm前後、深さ10～20cm程度で全周していたものと思われる。

遺物は炉埋設土器、窪み石２個、耳飾りが１個検出された。炉埋設土器（第８図）は、胴の部分が使用されており、現存高13cm、最大径19cmを測る。幅広の無文帯下に低隆帯が巡り、文様帯を分帯する。更に、縦長の楕円形枠状文を４箇所に配し、隆帯上には竹管状工具を押し付ける様にして斜位に刻み目を施し、枠状文で区画された内外の部位には、刻み目に使用したものと同一と思われる工具によって縦位の沈線が充塡される。器面は荒れが激しく、表裏面の細かい剝落が著しい。

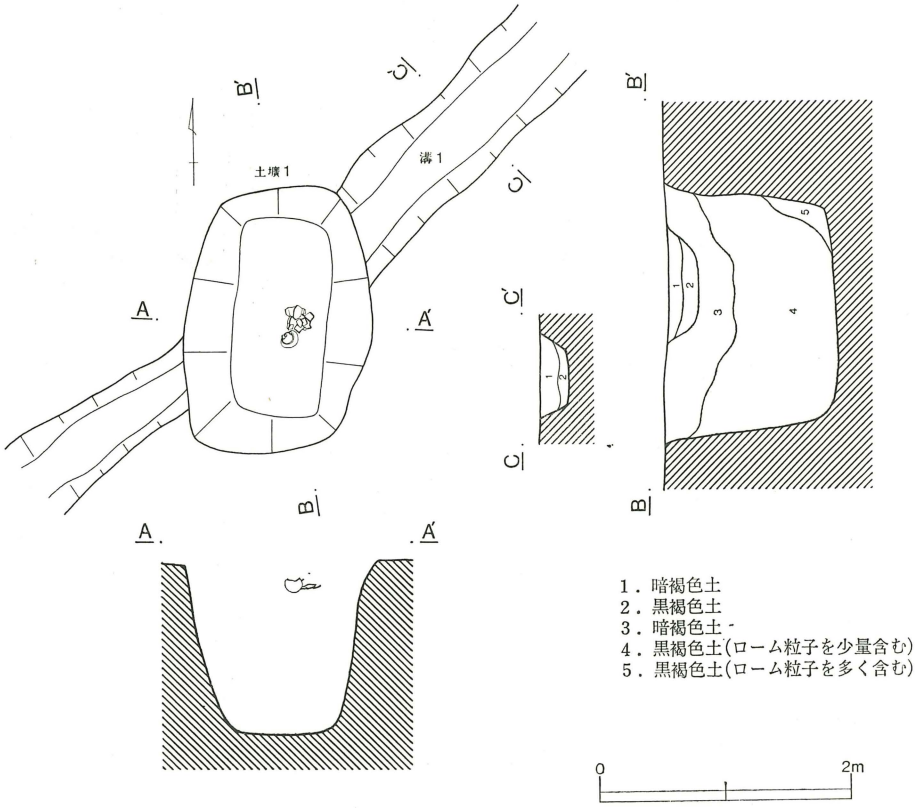
表２　第１号住居跡ピット計測表　（単位cm）

番　　号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
長　　径	63	36	42	28	(現)24	52	49	(現)42	30	40	46	45	47
短　　径	52	35	39	25	30	45	40	38	22	37	30	(現)24	41
深　　さ	51	50	49	25	15	48	49	10	27	11	41	39	34

耳飾り（第９図）はP_1の上層部から出土した。一部欠損するが、径2.7㎝、厚さ1.5㎝を測る。中央部に径１.２㎝の穴が貫通し、穴中央部は開口部より幾分径が窄まっている。穴は丸棒状のものを回転させて穿ったものではなく、やや角張った植物の茎と思われるものを押しつけて整形したことが、僅かに留める痕跡から窺われる。

石器は炉に使用されていた窪み石（第10図）２点である。１は、石の筋に沿って列状に多数の穴が穿たれ、２も平坦な面に２箇所穴が穿たれ、中央部は微かに窪み、敲打の痕跡が認められる。

2.　土壙と遺物



第11図　第１号土壙

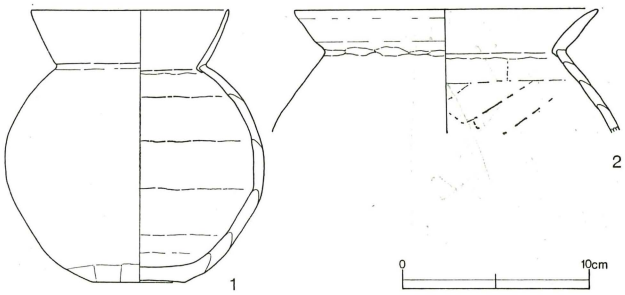
(1)　古墳時代の土壙

第１号土壙（第11図）

調査区北東部Ｂ—１グリッド内に位置する。主軸方向はＮ—5°—Ｅである。平面プランは、四角がやや丸みを帯びた隅丸長方形を呈し、長径210㎝、短径140㎝、深さ140㎝を測る。底面の状態はほぼ平坦であり、底面プランは四隅が角張った長方形を呈する。覆土の状況は、基本的には、暗褐色土で占められ、分層はローム小ブロック含有量に依拠した。

遺構確認面が暗褐色を呈していたため、プランが摑めなかったが、第1号溝を掘っていた際に壺と甕が各々1個体ずつ出土し、再確認したところ土壙の壁が検出され、存在が明らかになった。

出土遺物は壺と甕の2個体（第12図）であったが、壺は口縁を上にして正置され、甕は隣接して口縁を下にした状態でほぼ中央部東よりの確認面下約20cmに配置されていた。壺の口縁の一部と甕の胴下半部は、第1号溝構築時に破損されたものと思われる。



第12図　第1号土壙出土遺物

表3　第2号土壙出土土器観察表

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小型壺	1	口径 11.5 底径 4.9 器高 14.6	口縁部内彎ぎみに開く。胴部、扁球形を呈し、平底を持つ。	胴部全体に篦磨きが行なわれたと思われるが、器面の荒れ激しく不明瞭。底部付近で、篦削りによる面取りを行なう。胎土細砂を含む。焼成不良。橙褐色。	口縁部半分欠。他ほぼ完形。
甕	2	口径 16.2 現存高 6.5	口縁部外反ぎみに開く。頸部で強く「く」の字状に屈曲。	口縁部横ナデ。胴上半部斜位のナデ。胎土緻密。焼成不良。暗褐色。	口縁部1/4欠。胴部一部残存。

(2)　各時期の土壙（第13〜15図）

ここで記述する土壙は、時期を決定し得る遺物の出土がなく、平面プランも様々であるため、一括して述べることにした。尚、各土壙から縄文式土器が少量出土しているが、明らかに流れ込みと思わたので、グリッド出土遺物として取り扱った。

第2号土壙（第13図）

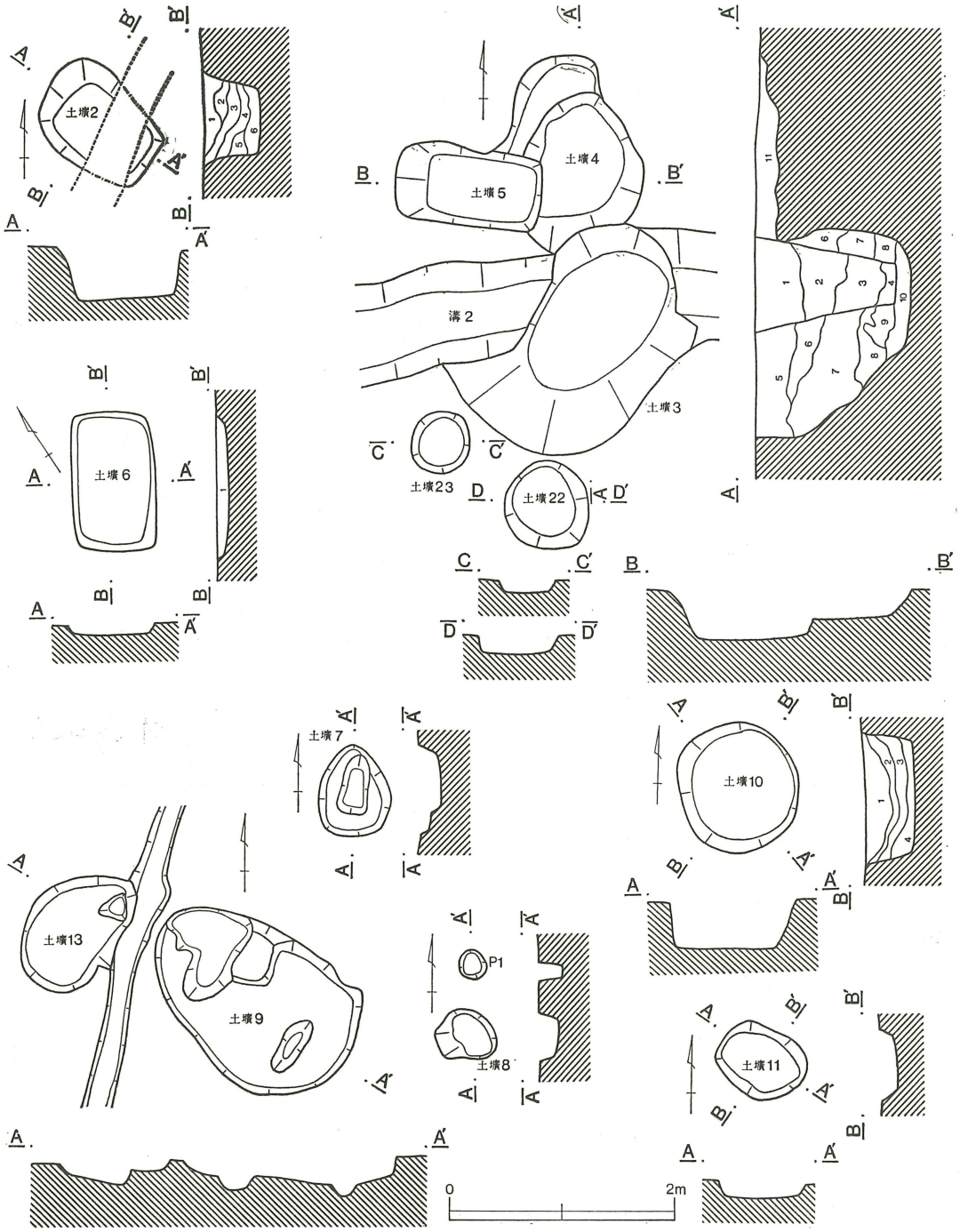
調査区北東部B—2区に位置する。主軸方向はN—51°—Wである。平面プランは四隅のやや丸い隅丸長方形を呈し、長径110cm、短径80cm、深さ50cmを測る。底面の状態はほぼ平坦であり、底面のプランは四隅のやや角ばった長方形を呈する。

覆土の状況は、暗褐色土と黒色土が交互に堆積した状態を呈し、各層ともローム粒子を少量含み、しまり、粘性共に非常に強い。

表土除去の際、湧水排水のため調査区に沿って掘った溝によって中央部が破壊されたが、一部調査区を拡張し、全景を摑むに至った。

第3号土壙（第13図）

調査区中央部東側D—4区に位置する。主軸方向はN—33°—Eである。平面プランは小判形を呈したものと思われ、長径220cm、短径140cm、深さ138cmを測る。底面の状態はほぼ平坦であり、



土壙2
1．暗褐色土
2．黒色土
3．暗褐色土
4．黒色土
5．黄褐色土
6．黒褐色土

土壙3. 4.　溝2
1．暗茶褐色土
2．褐色土
3．暗褐色土
4．黒褐色土
5．褐色土
6．暗褐色土
7．暗茶褐色土
8．黒褐色土
9．ローム塊
10．茶褐色土
11．黒褐色土

土壙6
1．暗茶褐色土

土壙10
1．黒褐色土
2．黒色土
3．暗褐色土
4．黒色土

第13図　各時期土壙平面・断面図(1)

底面のプランは長楕円形を呈する。覆土の状況は、全体的にロームブロックを含む層に分層できるが、粘性を帯びた緻密な土が間層として入る。この間層には、大きなローム塊が含まれるが、壁体が開口部より張り出しているため、それが崩壊して埋ったものと思われる。底面は小礫層上面である。

２号溝と切り合うが、溝の底面は土壙底面よりも高く、土層断面にくっきりと溝のプランが現われていた。

第４号土壙（第13図）

調査区中央部東側Ｄ—４区、３号土壙北側に隣接して位置する。主軸はＮ—12°—Ｗである。平面プランは不整楕円形を呈し、長径175㎝、短径110㎝、深さ20㎝を測る。底面は段差を持ち、凹凸が激しい。覆土は黒褐色土でローム粒子を少量含み、粘性は乏しいが、しまりよく比較的安定した状態を呈する。第４号土壙を切って第５号土壙が構築されていた。

第５号土壙（第13図）

第４号土壙と切り合って、その西側に位置する。主軸方向はＮ—84°—Ｗである。平面プランは長方形を呈し、長径130㎝、短径70㎝、深さ44㎝を測る。底面は平坦であり、そのプランも長方形を呈する。覆土は黒色土１層であり、底面付近でローム小ブロックを含む。

第６号土壙（第13図）

調査区中央部東側Ｄ—５区に位置する。主軸方向はＮ—36°—Ｅである。平面プランは長方形を呈し、長径125㎝、短径75㎝、深さ10㎝を測る。底面は平坦であり、そのプランも長方形を呈する。遺構確認面から下への掘り込みが浅く、覆土の状態も良好とは言えないが、ローム粒子をやや多く含む暗茶褐色土１層であった。覆土中より須恵器小破片が１点出土しているが、流れ込んだものと思われる。

第７号土壙（第13図）

調査区南側よりＥ—５区に位置する。主軸方向はＮ—10°—Ｅである。平面プランは五角形を丸くした様な不整楕円形を呈し、長径70㎝、短径65㎝、深さ20㎝を測る。底面には小ピット状の落ち込みがみられる。

第８号土壙（第13図）

調査区南側Ｅ—６区に位置する。主軸方向はＮ—38°—Ｗである。平面プランは不整楕円形を呈し、長径52㎝、短径48㎝、深さ18㎝を測る。底面は平坦であり、楕円形を呈す。

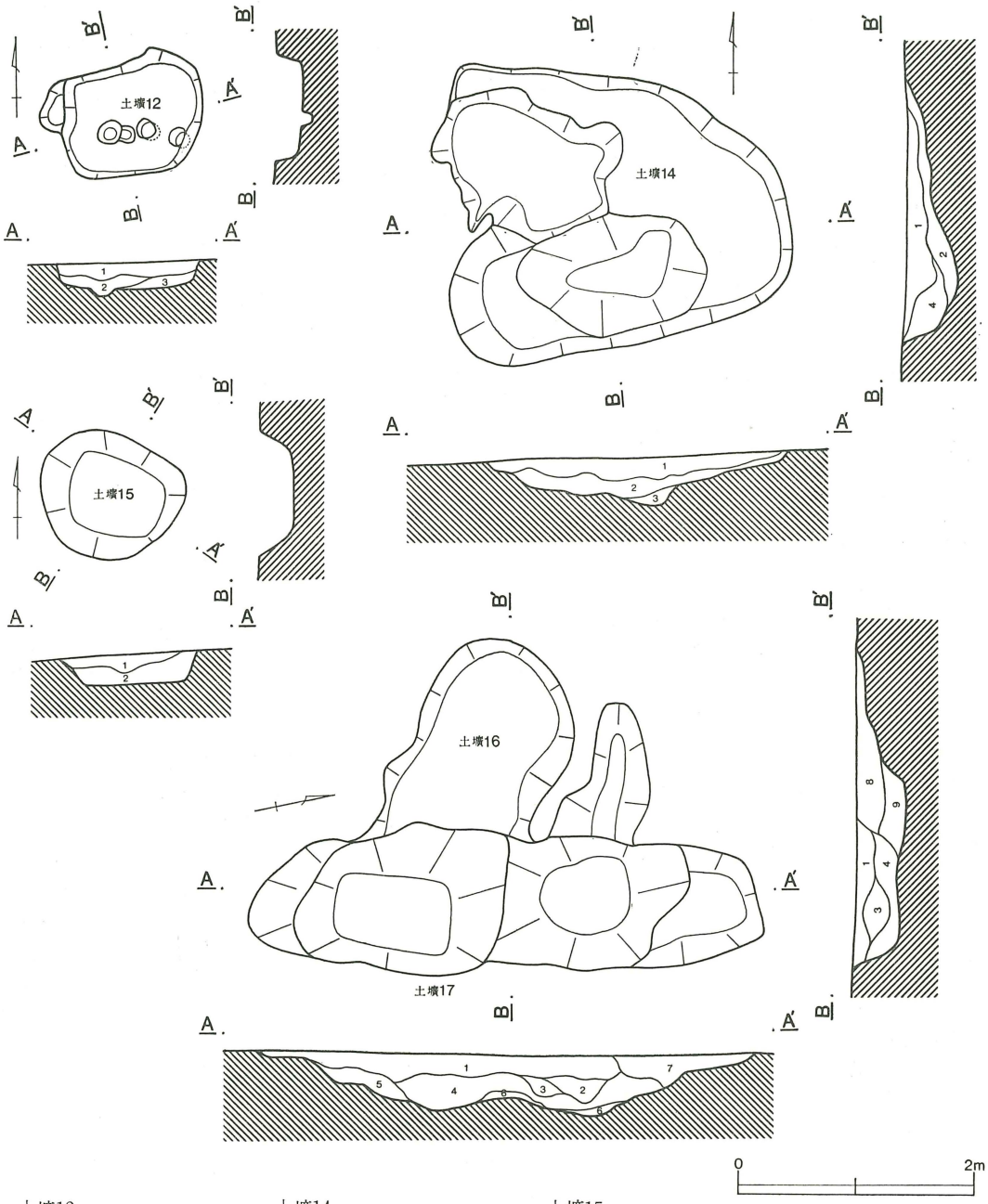
第９号土壙（第13図）

調査区南側Ｅ—６区、第３号溝の東側に位置する。主軸方向はＮ—52°—Ｗである。平面プランは楕円形を呈し、長径200㎝、短径127㎝、深さ最深部で28㎝を測る。底面は大きな凹凸が認められる。

第10号土壙（第13図）

調査区南側Ｅ—６区に位置する。主軸方向はＮ—29°—Ｗである。平面プランは円形を呈し、長径112㎝、短径105㎝、深さ48㎝を測る。底面は平坦であり、円形を呈する。

第11号土壙（第13図）



土壙12
1．暗褐色土
2．黒褐色土
3．黒色土

土壙14
1．暗茶褐色土
2．褐色土
3．茶褐色土
4．暗褐色土

土壙15
1．暗褐色土
2．黒褐色土

土壙16. 17.
1．褐色土
2．暗褐色土
3．褐色土
4．黒褐色土
5．褐色土
6．暗茶褐色土
7．茶褐色土
8．暗茶褐色土
9．黒褐色土

第14図　各時期土壙平面・断面図(2)

調査区最南部のE—6区に位置する。主軸方向はN—54°—Wである。平面プランは不整楕円形を呈し、長径76㎝、短径68㎝、深さ17㎝を測る。底面はほぼ平坦で、そのプランも平面プラテンに等しい。

第12号土壙（第14図）

E—6区に位置し、一部F—6区にかかる。主軸方向はN—72°—Eであり、平面プランは隅丸長方形を呈し、長径122㎝、短径93㎝、深さ25㎝を測る。底面は平坦で、ほぼ一列に小ピット4個を有する。ピットの深さ約20～30㎝である。

第13号土壙（第13図）

E—6区に位置し、主軸方向はN—38°—Eである。平面プランは不整楕円形を呈し、長径120㎝、短径85㎝、深さ18㎝を測る。底面は東に傾斜し小ピットを1個有する。3号溝と切り合うが、新旧関係は不明である。

第14号土壙（第14図）

E～F—5～6区にかかる。主軸方向はN—70°—Eであり、平面プランは複雑な不整楕円形を呈し、長径305㎝、短径105㎝を測る。底面は大きな凹凸が繰り返し、最深部で45㎝を測る。

第15号土壙（第14図）

調査区中央部E—5区に位置する。主軸方向はN—60°—Wである。平面プランは楕円形を呈し、長径118㎝、短径105㎝、深さ26㎝を測る。底面はほぼ平坦であり、平面プランも楕円形を呈する。

第16号・第17号土壙（第14図）

調査区中央部E—5区3号溝の西側に位置する。主軸方向は第16号土壙がN—57°—Wで、第17号土壙がN—11°—Eである。重複するが、土層断面から第17号土壙が第16号土壙を切って構築されていることが判明した。第17号土壙は長軸上に2～3基の土壙が重複している可能性を有するが、土層からは明確にそれとは判断できなかった。

第18号・第19号土壙（第15図）

調査区ほぼ中央部E～F—5～6区にまたがって位置する。主軸方向は、第18号土壙がN—21°—Wで、第19号土壙はN—1°—Eである。ともに平面プランは楕円形を呈すると思われ、底面は第19号土壙は平坦であるが、第18号土壙は段差がある。第2号溝と重複するが、新旧関係は第18号土壙＜第19号土壙＜第2号溝の順に新しくなることが土層断面から明確になった。

第20号土壙（第15図）

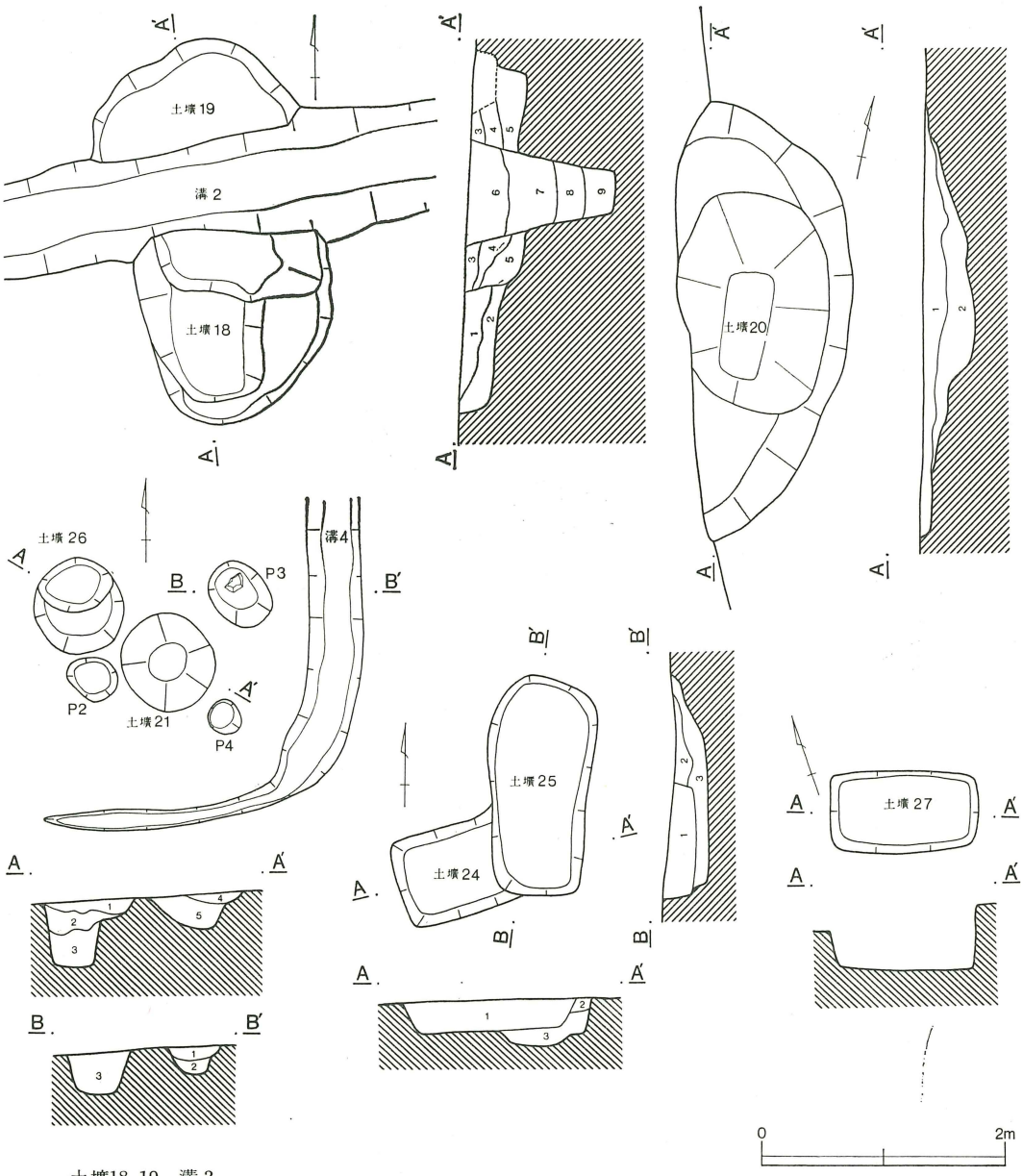
調査区中央部F—5区に位置する。西壁が攪乱により破壊される。主軸方向はN—5°—Wであり、平面プランは楕円形を呈していたものと思われる。底面は中央に向って緩く傾斜する。

第21号土壙（第15図）

調査区北側F—3区第4号溝の西側に位置する。主軸方向はN—46°—Wである。平面プランは円形に近い楕円形で、長径80㎝、短径72㎝、深さ55㎝を測る。底面は丸底状を呈する。

第22号・第23号土壙（第13図）

調査区東側D—4区で、第3号土壙の南側に位置する。主軸方向は第22号土壙がN—37°—Wで、



土壙18. 19. 溝2
1．暗褐色土
2．暗茶褐色土
3．茶褐色土
4．暗褐色土
5．黒褐色土
6．暗茶褐色土
7．褐色土
8．暗褐色土
9．黒褐色土

土壙20
1．暗褐色土
2．茶褐色土

土壙21. 26.
1．黒褐色土
2．暗茶褐色土
3．暗褐色土
4．黒褐色土
5．暗褐色土

土壙24. 25.
1．褐色土
2．黒褐色土
3．茶褐色土

P3. 溝4.
1．黒褐色土
2．褐色土
3．暗褐色土

第15図　各時期土壙平面・断面図(3)

第23号土壙がN—7°—Eである。ともに平面プランはほぼ円形を呈し、第22号土壙は径80㎝、第23号土壙は径55㎝で、深さはともに15㎝前後である。底面は両者とも平坦である。

第24号・第25号土壙（第15図）

調査区北側F—4区に位置する。主軸方向は第24号土壙がN—69°—Eで、第25号土壙はN—2°—Eである。平面プランはともに長方形を呈し、第24号土壙は長径約150㎝、短径74㎝、深さ26㎝で、第25号土壙は長径170㎝、短径80㎝、深さ35㎝を測る。底面は第24号土壙が平坦で、第25号土壙は北側に緩く上る。重複しているが、新旧関係は土層断面から第24号土壙の方が新しい。

第26号土壙（第15図）

調査区北側F—3区に位置する。主軸方向はN—8°—Wである。平面プランは楕円形を呈し、長径78㎝、短径72㎝、深さ52㎝を測る。底面の状態は一段落ち込み平坦な底部となる。第4号溝の西側に第21号土壙、ピット2、ピット3、ピット4等と隣接するが、相互関係は不明である。

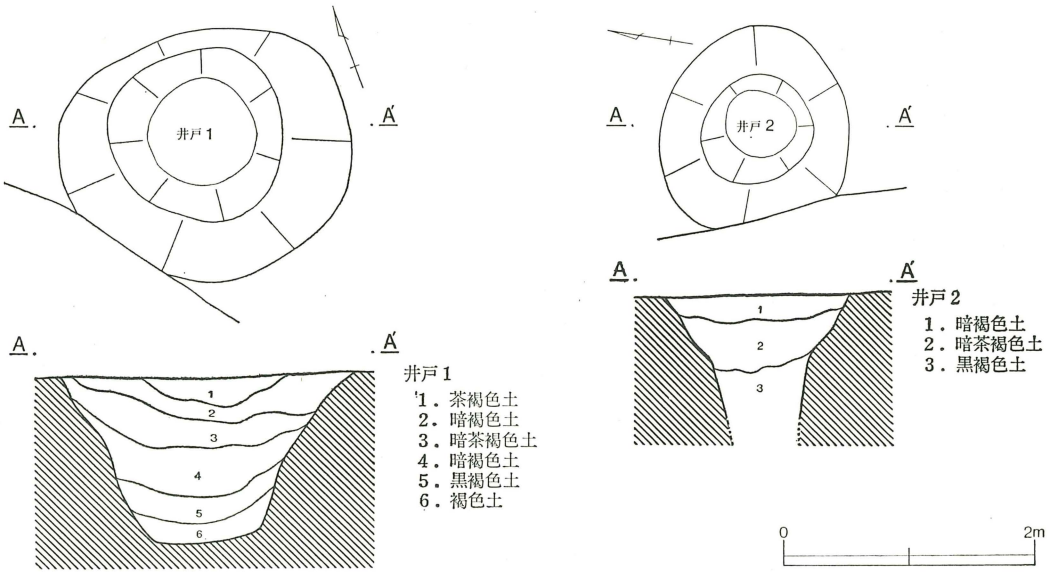
第27号土壙（第15図）

第4号溝の東側F—4区に位置する。主軸方向はN—72°—Wである。平面プランは長方形を呈し、長径122㎝、短径68㎝、深さ52㎝を測る。底面は平坦である。

3. 井　戸　跡

(1) 第1号井戸（第16図）

調査区西側F—5区第2号溝南に隣接する。排水溝により一部破壊されるが、ほぼ楕円形を呈する。長径230㎝、短径200㎝、深さ134㎝を測る。壁は緩やかに傾斜し約60㎝下で屈曲し、丸みを帯びた底面へと移行する。第2号溝と同様小礫層上面が底面にあたり、自然堆積したことが窺える。



第16図　井戸平面・断面図

(2) 第２号井戸（第16図）

Ｆ～Ｇ—４区第２号溝の北に位置する。ほぼ円形を呈する。径150㎝で深さは90㎝下まで掘ることができ、下部の径は60㎝を測る。第１号井戸同様、50㎝下で屈曲し円筒状に下降する。規模の差はあるが、形態等は第１号井戸に類似する。出土遺物はなく構築時期は不明である。

4. 溝　　跡

溝は４本検出されたが、時期を決定し得る遺物の出土はなく、一括して述べることにする。

第１号溝はＡ—１区からＣ—２区にかけて位置し、蛇行しながら、幅約60～70㎝、深さ約20㎝前後で建物の下へと延びている。遺物は、流れ込みと思われる須恵器の小破片が少量出土した。

第２号溝はＤ～Ｆ—４～５区にかけて調査区を横断する形で位置している。幅約80～100㎝前後、深さ約120㎝前後でほぼ直線的に延びている。壁は確認面から約50㎝下で緩く屈曲し、直線的に底部へ移行する。覆土は緻密でしまり、粘性ともに強く安定している。切り合い関係にある各土壙より新しい。遺物は流れ込みによる縄文式土器で比較的大形破片が出土している。

第３号溝はＥ—５～６区にかけて位置する。全長10.7ｍを測り、幅40㎝前後、深さ15㎝前後でほぼ直線的に延びている。部分的に底面が浅く、疑問も残るが一応溝として取り扱った。

第４号溝はＦ—３～４区に位置し、「」状に屈曲して傾斜面に消えていく。

他の遺構としてピット１～４があり、ピット３には底面に石が置かれていた。

5. グリッド出土遺物

本遺跡から出土した遺物の総量は、コンテナ箱にして５箱程であるが、実際グリッドの各区遺構外から出土した遺物は少量であった。更に、遺構に伴い構築時期を決定し得る遺物はなく、明確に流れ込みと判断できるものであったため、グリッド出土遺物と同質と判断し、一括して述べることにした。遺物の殆どが細片で、摩耗が激しく、文様、地文等が不明瞭であるが、その中でも比較的良好なものや特徴のあるものを選出した。尚、個々の観察については、観察表にまとめた。

(1) 土　器

第Ⅰ群土器

縄文時代中期後半の土器群を一括する。以下の１～５類に分類でき、それぞれ更に細分できる。

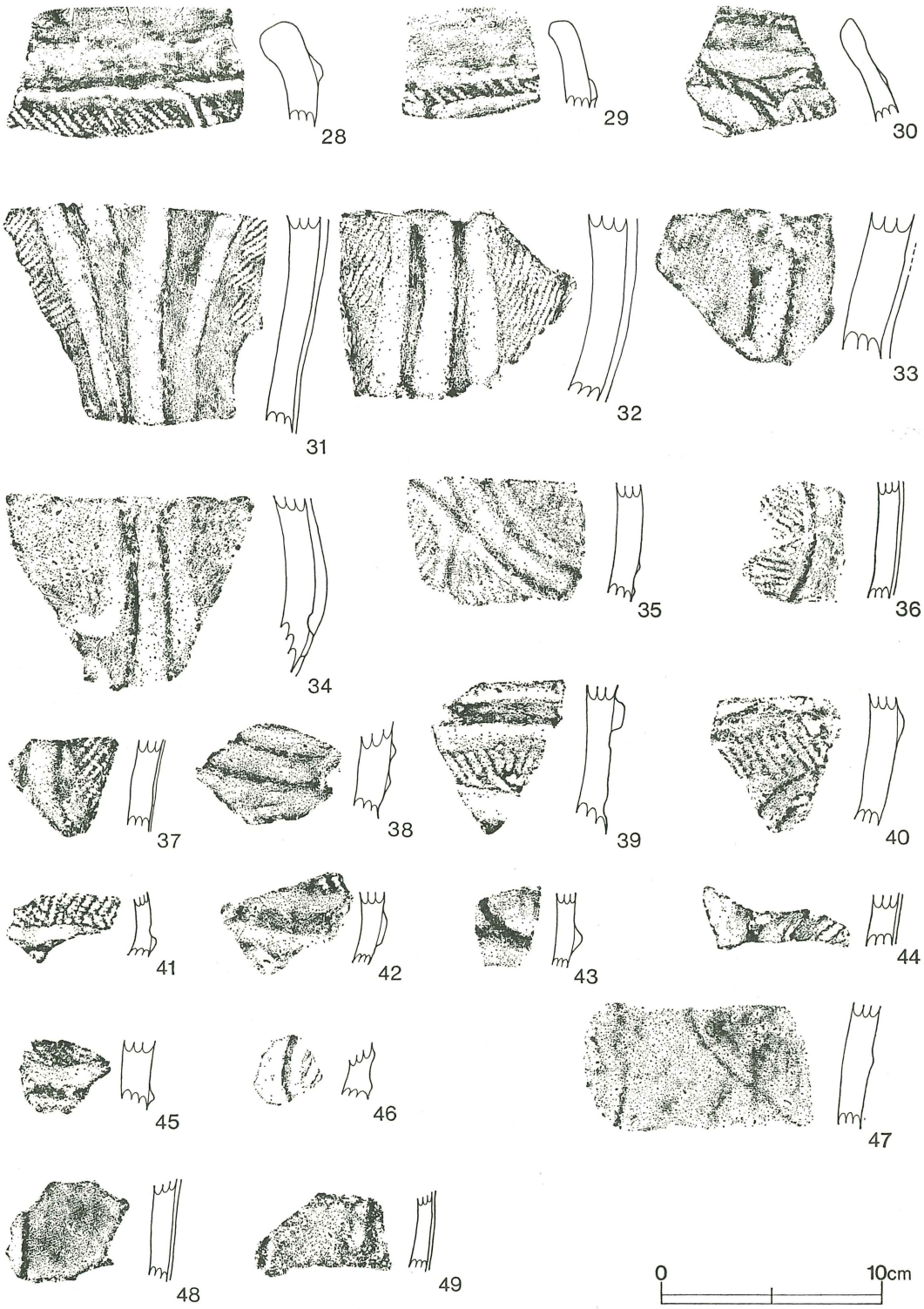
第１類（第17図１～３、５～11）

加曾利Ｅ式系統で、口縁部文様帯と胴部文様帯から成り、口縁部文様帯は隆帯を貼付して文様を構成し、胴部文様帯は沈線による懸垂文が縦分割を行い、縄文帯と無文帯を交互に描出する深鉢形土器である。

Ａ種（第17図１）

口縁部文様帯にあたり、隆帯で渦巻状、又は楕円状に区画した後、縄文を充塡するものである。１は、やや甲高で上面平坦な隆帯を貼付し、両裾に沿ってなぞりを施した後に、単節ＲＬを充塡

第17図　グリッド出土土器(1)



第18図　グリッド出土土器(2)

する。器壁が厚いことから大形の深鉢であったと思われる。

B種（第17図２、３、５～11）

胴部文様帯にあたり、懸垂沈線文によって分割された胴部に無文帯と縄文帯が繰り返されるもので、施文手法により細分できる。

ａ、２本沈線による懸垂文間が狭く、縄文帯内に蛇行沈線懸垂文を配する。(11)１点のみ出土したが、施文順位をみると、地文として縄文ＲＬを施した後に、懸垂文、蛇行沈線文を施文する。

ｂ、幅広の無文帯を持ち、縄文帯には、横回転の縄文が充塡される。（２）

ｃ、通常の胴部文様帯のあり方を示し、縄文帯には、縦回転の単節ＲＬ、又はＬＲが充塡される。（３、５～10）

第２類土器（第17図12～27）

沈線によって文様が描出される深鉢形土器を一括する。この類の縄文手法は、充塡縄文が多い。

A種（12）

２本対の平行沈線により大形の渦巻文が描出されるものである。12の１点のみであるが、器形は波状口縁を呈し、緩く内彎するキャリパー形である。四角く迫り上った把手が４箇所に配されると思われるが、不明である。平行沈線は胎土があまり乾燥していない状態で施文されたらしく、沈線間及び外側が淡く盛り上る。縄文は全て沈線施文後に充塡されている。

B種（13）

２本対の平行沈線によって幅広の無文帯が形成され、文様が描出されるものである。口唇部は内削ぎ状を呈し、外側の先端部がやや角張る。地文に単節ＲＬを縦回転に施文した後、沈線を施し、沈線間を磨り消す、磨消縄文手法をとる。文様構成は小片であるため不明である。

C種（４、14、16～19、25～27）

口唇部下に１条の沈線を巡らして無文帯を形成し、胴上半部に波状の沈線文を描き、それより上側に縄文を充塡するもので、胴下半部は胴上半部の波底部に対応する形で「∪」状の懸垂文が描かれ、縄文が充塡される。

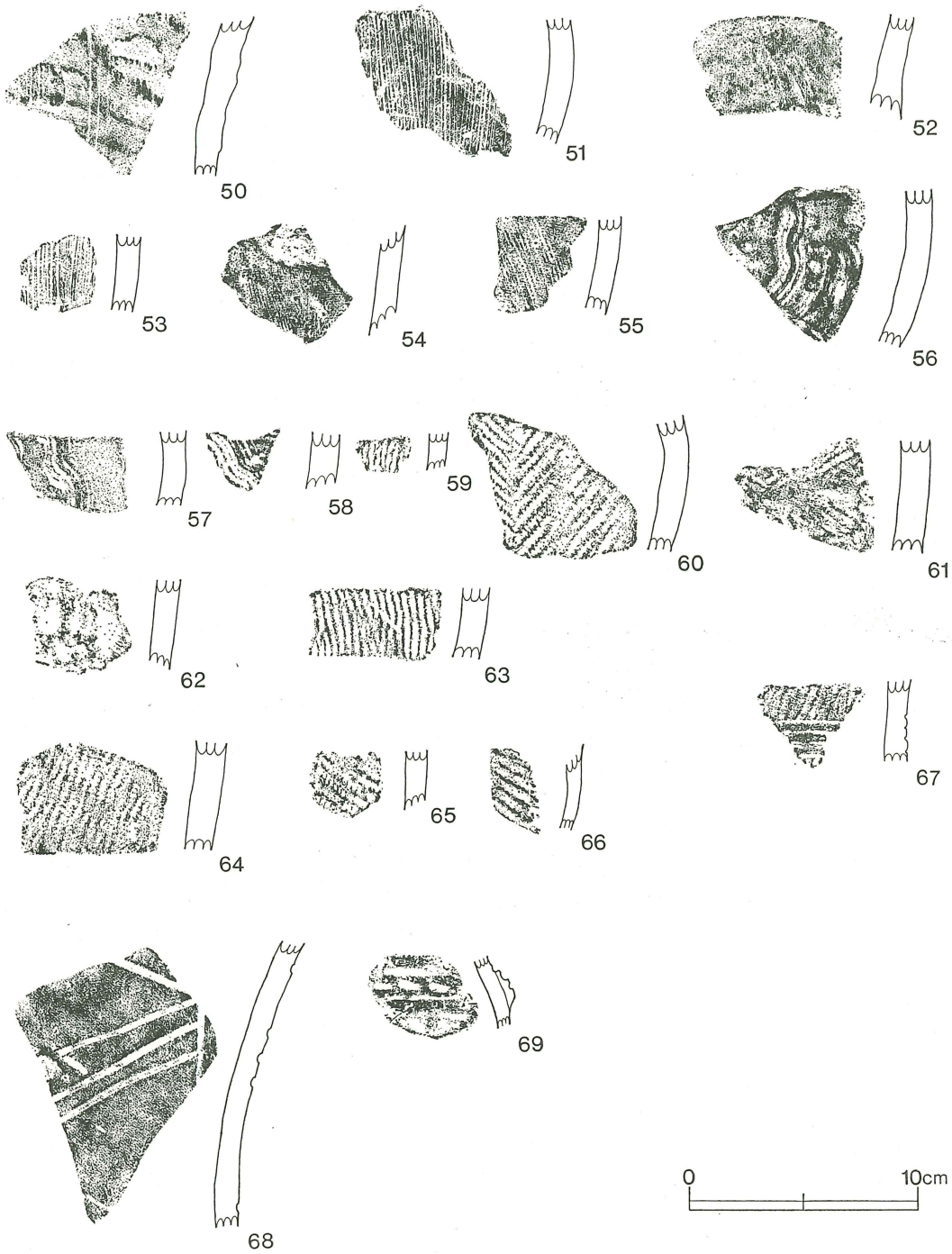
口縁部破片では、14は、口縁部沈線下に単節ＬＲを１段横回転した後、縦回転に充塡する。16、17は器面の荒れが激しく不明瞭であるが、14と同様の構成をとるものと思われる。16は波長が短かくて、17は長い。

胴部破片では、４と19が比較的遺存状態がよく文様構成もしっかりとしている。18は沈線がやや彎曲して全体構成が不明瞭であるがこの種とし、一括して考えた。他に、25～27も器面の荒れが激しく詳細不明であるが、この種に一括した。

D種（20～24）

口縁部に連結する破片がなく、胴部破片だけであるが、胴上半部「∪」状のモチーフ間に、胴下半部の「∩」状懸垂文が、ずれ込んで中間に対応する構成をとるものである。おのおの縄文が充塡される。

ａ、胴上半部のモチーフはC種と同様のものと思われ、下半部がずれ込むもの。(20、23、24)20は上半部の「∪」状モチーフの幅が狭く、この破片では縄文が充塡されず、下半部の幅広の「∩」



第19図　グリッド出土土器(3)

状懸垂文内には縄文が充塡される。23、24は器面の荒れが著しいが、この種に一括した。

b、胴下半部はaと同様であるが、上半部は、2本沈線によって「U」状モチーフを描き、縄文を充塡する。(21、22) 21、22は同一個体であるが接合しない。

第3類土器（第18図）

隆帯によって文様が描出される深鉢形土器を一括した。隆帯の本数、太さによって更に細分できる。

A種（31～34）

太めの2本の隆帯によって文様が描出されるもので、隆帯脇に幅広のなぞりが施される。31～34は胴部破片であるが、34は胴上半部であり「H」字状のモチーフが窺われる。縄文は、全て隆帯脇のなぞりが施された後に充塡される。

B種（35～38）

2本の隆帯によって文様が描出されるのはA種と同様であるが、B種は幅の狭い微隆起線状の隆帯が使用される。A種が比較的直線的なモチーフを描くのに対して、B種は曲線的な文様構成をとる。縄文は全てなぞりが施された後に充塡される。

C種（39～46）

太目の1本隆帯で文様が描出されるものである。どの様な文様構成をとるか、小破片のため不明あるが、やはり曲線的なモチーフをとるものであろう。施文順位によって細分できる。

a、縄文施文後に、隆帯脇のなぞりを施す。(41) 隆帯と縄文との順位は不明である。

b、なぞりを施した後、最後に縄文を充塡するものである。(39、40、42～46)

D種（47～49）

微隆起線状の1本隆帯によって文様が描出されるものである。縄文は、やはり最後に充塡される。47は曲線的なモチーフを描き、48、49は直線的で、口縁部に1条巡らされた隆帯から垂下するもので、2本が一対になって幅広い無文帯を構成するものであろう。

E種（28～30）

口縁部に1条の隆帯を巡らし、無文帯を構成する口縁部破片を一括した。更に細分できる。

a、口縁部の隆帯から、微隆起線状の隆帯を垂下するもので、隆帯脇のなぞりを施した後に縄文を充塡するものである。(28)

b、文様構成はaと同様であるが、口縁部隆帯上に縄文を施文する。(29)

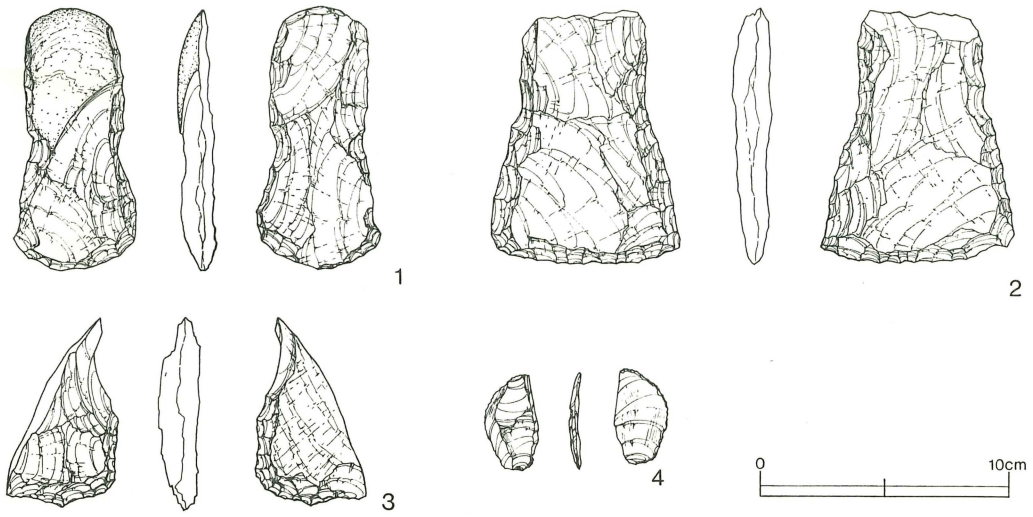
c、口縁部に無文帯を構成するのはa、bと同様であるが、隆帯が曲線的文様構成をとる。隆帯上には縄文が施文される。(30)

第4類土器（第19図50～58）

地文に条線文が施文される深鉢形土器を一括する。

A種（50～55）

地文の条線文が細くて浅いもので、直線状のものである。50は胴部が緩く括れ、外反しながら口縁部が内彎する深鉢形土器の胴部と思われ、器面調整が粗く指頭で撫でおろした様な凹凸が著しく、その上に軽く条線を施文する。52も同様な器形を呈すると思われる。51、53～55は、胴部がや



第20図　グリッド出土石器

や丸みを帯び口縁部が緩く内彎する、器高の低い鉢形土器の一部と思われる。やはり、細く繊細な条線が浅く施文される。

B種（56～58）

条線が蛇行して波状を呈するものである。aよりも条が太く、間隔もやや開く条線で、器面があまり乾燥しないうちに施文したのであろうか、比較的深く器面を抉り取る様に施文される。

第５類土器（第17図15、第19図59～67）

縄文のみ施文される土器群を一括する。しかし、他の文様要素と組み合わさって地文として施文されたものも含まれる可能性があるが、ここでは破片内に縄文のみ認められる土器を一括した。

A種（59）

撚糸文が施文されるものである。59は撚糸Ｌが縦方向に施文される、胴部小破片である。

B種（60～61）

羽状縄文が構成されるものである。60は単節ＲＬとＬＲとが縦方向に施文される。61は器面の荒れが著しく、不明瞭であるが、微隆起線等で口縁無文帯を区画し、胴部に１段横回転の縄文を施した後縦回転する土器の一部であると思われる。

C種（15、62～66）

斜行縄文のみ施文される土器を一括する。62は複節ＲＬＲを施文する。63、64はやや斜め方向に、66は縦方向に施文されるが、恐らく沈線で区画された中に充塡された縄文部分であろうと思われる。

D種（67）

地文に３本撚りのＲＬを施した後に、半截竹管状工具による４本沈線で区画するものである。文様要素としての沈線が施されることは、この類から除外しなければならないのであるが、第２類土器とは明らかに様相が異なり、とりあえずこの類に一括することにした。加曾利ＥⅠ式段階の土器に類似する。

第Ⅱ群土器（68、69）

縄文時代後期初頭の土器群を一括する。2片検出されたが、68は外反しながら口縁部に移行する深鉢形土器の胴部であり、沈線で文様が描出されるものである。69は幅広の隆帯を貼りつけ、その頂部に角棒状工具によって、押し引き状に横長の刺突列を1条巡らす。器形的には口縁が「く」字状に内折する、深鉢形土器の口縁部付近と思われる。堀之内式に比定されよう。

(2) 石　器

調査区全域から出土した石器は、僅か4点のみである。近距離に都幾川が流れ、原石を入手するのには絶好の環境下に立地しているが、石器が少な過ぎる感がある。

1は、楕円形の母岩から縦長に剥取された扁平な剥片に、左右からの加撃で大形の調整剥離を施して成形し、両サイド及び刃部に細かい調整剥離が施される。そのため、表裏に大きな剥離痕が残り、又、礫表も一部残されている。短冊形を呈するが、中央部の左右がやや括れ、刃部は弧状を呈し鋭い。縦10.5㎝、横最大幅を刃部に持ち4.8㎝を測る。

2は、扁平に剥げる石の節理を利用した扁平な剥片に、両サイド、刃部に細かい調整剥離を施している。所謂撥形を呈するが、頭部を欠損する。刃部は直線状を呈し、表裏からの交互剥離によって作り出され、刃角は約90°程開き、鋭さはない。縦は現存値で9.8㎝、横は刃部で7.6㎝を測る。

3は、胴中位から刃部にかけて斜めに欠損するもので、全体の$^{1}/_{3}$位にあたるものと思われる。1の様な短冊形を呈するものと思われるが、中央部の括れ具合は強い。刃部は階段状剥離によって作り出される。刃部の現存値は4.2㎝を測る。

4は、黒耀石製の剥片であり、縦3.8㎝、横2.1㎝を測る。形態的には、先土器時代のナイフ形石器に類似するが、細かいブランティングは施されていない。表側は、上下からの剥離痕が残り、左サイドは、主要剥離面との間に鋭いエッジを形成し、彎曲する。このエッジを刃部として使用したと思われるが、エッジに残された刃毀れ状の痕跡の一部は使用の際生じたものと思われ、他の殆どの部分は、遺物が流れ込みという性質上、移動する際に生じた傷と考えられる。

表4　グリッド出土土器観察表

番号	分類	出土地点	色調	胎土	文様要素及び施文順位 備考
1	Ⅰ群1—A	土壙17	F(C)D	a_1、b_3、e_3、g_2、h_1	R→N→J(RL↘)
2	1—B—b	溝2	H(C)F	a_2、b_3、e_3、g_2、h_1	C→J→N(RL→)
3	1—B—c	溝2	J(B)J	a_1、b_1、e_2、f_1、h_3	C→J(LR↓)
4	2—C	溝2	F(A)H	a_2、b_1、d_3、e_2、h_3	C→J(LR↓)
5	1—B—c	F—4	F(A)J	a_1、b_2、d_3、e_3、f_3、h_1	C→J(LR↓)
6	1—B—c	溝2	G(F)E	a_2、b_3、c_3、d_2、f_3、h_3	C→J(RL↓)
7	1—B—c	溝2	C(B)F	a_1、b_3、c_3、f_2、g_1	C→J(RLr_3↓)
8	1—B—c	溝2	J(C)F	a_2、b_3、f_1、g_1、h_3	C→J(RL↓)
9	1—B—c	溝2	F(B)B	a_2、b_2、e_2、f_3、g_1、h_3	C→K→J(LR↓)
10	1—B—c	土壙17	C(B)F	a_2、b_3、d_3、e_3、f_3、g_1	C→J(RL↓)
11	1—B—a	土壙14	C(B)F	a_1、b_3、d_3、e_3、f_2、h_3	J(RL↓)→C
12	2—A	溝2	C(B)J	a_1、b_2、d_3、e_3、f_2、g_2、h_1	C→J(RL↘→)
13	2—B	土壙17	B(B)F	a_2、b_3、c_2、e_3、f_3、h_2	J(RL↓)→C→K
14	2—C	溝2	J(C)F	a_2、b_3、d_2、e_3、f_2、h_1	C→J(LR→↓)
15	5—C	土壙20	J(C)J	a_2、b_3、d_3、f_2、h_2	J(LR↓)
16	2—C	G—4	B(B)F	a_1、b_2、d_3、f_2、g_2、h_1	C→J？(器面荒不明)
17	2—C	土壙21	F(C)G	a_3、b_1、d_2、e_2、f_3、h_1	C→J？(器面荒不明)
18	2—C	溝2	H(C)C	a_1、b_3、d_3、f_2	C→J(LR)
19	2—C	溝2	J(C)J	a_2、b_2、e_3、f_3、g_2、h_1	C→J？
20	2—D—a	溝2	F(A)F	a_3、b_2、c_2、e_3、f_3、g_2、h_3	C→J(LR↓)
21	2—D—b	溝2	F(A)H	a_1、b_3、c_3、e_3、f_2、h_2	C→J(LR)
22	2—D—b	溝2	C(C)H	a_1、b_3、c_3、e_3、f_2、h_2	C→J(LR)
23	2—D—a	溝2	C(C)C	a_2、b_3、d_3、e_3、f_3、g_2、h_1	C→J？　不明
24	2—D—a	F—4	B(B)H	a_1、b_3、e_2、f_2、g_3、h_2	C→J？　不明
25	2—C	溝2	F(A)J	a_1、b_3、e_2、f_3、g_2、h_3	C→J(LR↓)
26	2—C	F—4	D(A)I	a_3、b_3、c_3、d_3、f_3、h_2	C→J？　不明
27	2—C	溝2	F(B)I	a_3、b_3、d_3、e_3、g_2、h_2	C→J　不明
28	3—E—a	溝2	C(C)F	a_2、b_3、e_3、f_2、g_3、h_2	R→N→J(RL→)
29	3—E—b	溝2	G(C)G	a_2、b_3、c_3、e_3、f_2、g_3、h_2	R→N→J(RL→)
30	3—E—c	土壙17	C(C)C	a_3、b_3、d_2、e_2、f_2、h_3	R→N→J(RL→)
31	3—A	溝2	J(B)F	a_1、b_2、d_3、e_3、g_3、h_2	R→N→J(RL↓)
32	3—A	土壙20	C(B)C	a_1、b_1、d_3、e_2、f_3、g_3、h_1	R→N→J(RL↘)
33	3—A	溝2	I(B)C	a_1、b_1、d_3、e_3、f_3、g_2、h_1	R→N→J　不明
34	3—A	溝2	B(B)B	a_1、b_1、c_3、d_3、e_3、f_3、g_3、h_1	R→N→J　不明
35	3—B	溝2	E(D)F	a_1、b_1、d_3、e_2、f_3、h_1	R→N→J(RL↓)
36	3—B	F—3	A(A)C	a_3、b_3、d_3、e_3、h_3	R→N→J　不明
37	3—B	溝2	J(J)F	a_1、b_2、d_3、e_2、h_2	R→N→J(RL↓)
38	3—B	溝2	F(C)F	a_1、b_3、c_3、d_3、e_3、h_3	R→N
39	3—C—b	溝2	F(B)J	a_1、b_2、d_3、e_2、g_2、h_1	R→N→J(RL→)
40	3—C—b	土壙21	J(B)B	a_3、b_3、d_3、e_3、h_2	不明
41	3—C—a	溝2	J(C)J	a_2、b_3、e_3、h_2	R→J(RL→)→N
42	3—C—a	土壙20	G(E)F	a_3、b_3、c_3、e_3、f_3、h_1	R→N→J(RL→)
43	3—C—b	溝2	F(C)F	a_1、b_3、d_3、e_3、h_3	R—不明
44	3—C—b	土壙17	J(H)J	a_3、b_1、e_3、f_1、h_1	R→N→J(LR→)
45	3—C—b	溝2	J(C)C	a_3、b_3、d_3、e_3、f_2、h_2	R→NJ不明
46	3—C—b	土壙17	H(H)H	a_3、b_1、d_3、e_2、f_3、h_1	R→N→J(LR→)

番号	分　　類	出土地点	色　調	胎　　土	文様要素及び施文順位 備　　考
47	3－D	G－4	C(C)H	a_1、b_3、d_2、e_3、g_2、h_1	R→N→J(RL↘)
48	3－D	土壙17	G(B)F	a_2、b_3、d_2、e_2、f_1、h_2	R→N
49	3－D	溝2	G(B)B	a_2、b_3、d_2、e_2、f_1、h_2	R→N
50	4－A	溝2	F(B)C	a_1、b_3、c_3、d_3、e_2、g_3、h_1	X
51	4－A	溝2	J(C)H	a_2、b_3、e_3、f_3、h_2	X
52	4－A	溝2	I(C)H	a_2、b_1、d_3、e_3、f_3、h_1	X
53	4－A	表採	F(C)F	a_3、b_3、e_3、h_2	X
54	4－A	土壙18	F(D)E	a_1、b_1、e_2、f_3、h_1	X
55	4－A	溝2	J(C)C	a_1、b_2、d_3、e_2、f_3、h_2	X
56	4－B	F－4	C(C)F	a_1、b_3、d_3、e_2、h_1	X
57	4－B	土壙17	H(C)H	a_1、b_3、d_3、e_2、h_3	X
58	4－B	溝9	J(B)E	a_1、b_3、e_2、f_3、h_3	X
59	5－A	土壙17	F(F)C	a_3、b_3、e_3、h_3	Y(L)
60	5－B	溝2	J(C)I	a_3、b_2、d_2、e_2、h_3	J(RL、LR↓)
61	5－B	表採	J(C)F	a_3、b_2、d_3、e_2、f_3、g_3、h_3	J(LR→↓)不明
62	5－C	F－3	F(D)F	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_1	J(RLR↓)
63	5－C	溝2	C(D)F	a_3、b_3、d_2、e_3、g_2、h_3	J(RL↙)
64	5－C	溝2	F(E)F	a_3、b_3、e_3、g_3、h_1	J(RL↘)
65	5－C	土壙17	F(B)C	a_1、b_3、d_3、e_2、f_3、h_2	J(RL→)
66	5－C	溝2	C(C)C	a_2、b_2、e_2、f_3、h_1	J(LR↓)
67	5－D	土壙11	J(J)H	a_3、b_3、e_3、f_3、g_1、h_2	J(RLr_3↘)→C
68	Ⅱ群	溝2	F(B)F	a_1、b_2、c_3、d_3、e_2、f_3、g_3、h_2	C
69	Ⅲ群	F－4	D(D)F	a_2、b_2、d_3、e_2、f_3、g_2、h_2	R→N→刺突

土器観察表の見方

◦色　調　外面（器肉）内面の順で表記

A　黒　色　B　黒褐色　C　暗褐色　D　褐　色　E　茶褐色

F　暗赤褐色　G　赤褐色　H　暗黄褐色　I　黄褐色　J　灰褐色

◦胎　土　含有粒子別に分け、含有量を数字で表記

a　白色粒子（0.5mm以下）

b　白色不透明粒子（0.5～2mm）

c　白色針状（0.5～1mm）

d　黒色粒子（0.5mm以下）

e　黒色柱状（0.5mm以下）

f　黒色板状（0.5mm以下）

g　片岩（1～3mm）

h　小礫（2mm以上）

含有量

1　多い

2　少い

3　微量

◦文様要素　R(隆帯)　C(沈線)　N(なぞり)　縄文(J)　撚糸(Y)　条線(X)

S(磨消)　K(研磨)　他は文字で表記

◦施文順位　→で順位（→　↘　↓）で方向を表記

Ⅵ 考 察

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代中期の住居跡１軒、古墳時代の土壙１基、各時期の土壙25基、時期不明の溝４本、井戸２基、ピット４個であった。そして、出土した遺物は少なく、コンテナ箱にしておよそ５箱程度であった。出土量こそ少なかったが、中には貴重な遺物も含まれている。ここでは、個々の遺構・遺物に関して検討すると共に、それ等が保有する性格、及び派生する諸問題点について、若干の私見を混えて考察を加えて行きたい。尚、参考文献等は巻末に一括した。

１）遺跡全体について

衆生ケ谷遺跡が立地する地形的環境は、何度も述べてきた通りであるが、詳細な部分を観察してみると、次の様である。今回の調査区に於いて、標高にしてローム面が一番高い部分は、調査区最南端のＥ－６区であり、標高約 78.60m を測る。ここから調査区に沿って、Ａ－１区にかけてのライン上は、Ｅ－６区より幾分標高が下り、約 78.40m 前後を測るが、ほぼ平担な面を呈している。この面上に、住居跡、及び土壙が集中して存在する。この平担な面は、Ｔ－３区からＧ－４付近で北西方向に緩く傾斜し始めて谷状を呈し、建物南側Ｇ－３区では約１ｍの比高差を測る。そして、建物の下部を通り、Ｇ－２区の１トレンチ内では約 1.8m の比高差を測る。この北西方向に傾斜する谷の深度及び規模については不明であるが、今回の調査で、谷の存在を確認できたことは、遺跡の範囲を限定する上でも大きな成果であったと言えよう。

また、この谷のローム面に近い部分で縄文式土器が検出されたことから、谷が縄文時代及びそれ以降にかけて、除々に埋没していった過程が窺われる。縄文時代所産と思われる遺構は、台地上の平担部に構築され、他の遺構は台地上及び緩斜面上に構築されている。特に、緩斜面上の遺構は、谷の埋没土を掘り込んで構築されており、谷が埋没した以降の所産であると明確に判断できるものであった。

２）住居跡について

検出された住居跡は１軒で、しかも遺存状態は悪く壁体も残存しない有様であったが、周溝が巡り、柱穴、炉の遺存状態は比較的良好であったため、辛うじて、その全貌を窺うことができた。ピットは総数13個検出され、うちＰ１，Ｐ６，Ｐ７，Ｐ10，Ｐ12，Ｐ13の６個は形状の計測値がほぼ一定値を示し、この住居跡は、一般的には６本を主柱としたものであると考えられる。しかし、６個の柱穴のうちでＰ10は、他に比べて浅く、貧弱な状態であり、Ｐ１は重複していたことを考慮すると、５本主柱であって建て直されたことも考えられる。

実際調査に当たって、柱穴については特に注意深く調査してみるが、覆土の状態が自然流入土であるのか、埋め戻しであるのか判断することが難しい場合が多く、むしろ完全に埋め戻しであって、上面に貼床をしていると判断できる事例は比較的少ない様に思われる。住居跡の建て直しについて論じる場合、柱穴の覆土が問題にされる（註１）ことは言うまでもないが、ちなみにこの住居跡では、Ｐ７，Ｐ８の覆土は１層の状態を呈し、Ｐ１，Ｐ６，Ｐ12，Ｐ13，は柱痕状の土層が観密

された。柱痕状を呈するピットの土層は、柱痕と思われる部分の土が周辺に比べてしまりが弱く黒味を帯びる傾向にあって、ローム粒子が若干含まれており、周辺部はしまりが強く、詰め込まれた様な状態を呈していた。Ｐ１の場合は切り合いが明確にセクションに現れ、切られる側の土層はしまりに欠け、埋め戻された状態を呈していた。また、Ｐ７の土層では、柱痕状の痕跡の有無は明らかではなかったが、一度に埋め戻された状態ではなく、覆土は他のピットと同様な色調・しまり・粘性を持っていた。

以上の状況から判断するに、この住居跡は少なくともＰ１を僅かに移動していることから建て直された可能性が高く、廃棄時には上屋構造が存在していたと推測される。また、入口部と想定される部分に、覆土の状態からは新旧関係がはっきりしなかったが、ピットが４箇所集中していることを積極的に判断すれば、上記の傍証ともなり得よう。

３）土壙について

土壙は総数26基検出され、構造時期の判明する土壙は１号土壙の１基のみであった。１号土壙は、覆土が確認面と同様相を呈していたため、確認時に見逃していたものであったが、１号溝を掘り進む際に土器が出土し、その存在が明らかになったものである。土器は、小型壺と甕の２個体で、ほぼ中央部、やや東より確認面下約20㎝の所で検出されたものであるが、出土状態は、あたかも設置されていたかの様な状態を呈していた。土壙自体比較的しっかりと深く掘り込まれ、何等かの目的のために構築されたであろうことは疑いない。

この土壙の用途を推察すると、①墓壙②井戸③貯蔵穴が考えられる。①墓壙であるとすると、出土した土器は、供献、もしくは副葬されたものと思われ、出土位置から、埋葬し終わった時点で設置されたものであろう。②井戸であるとすると、確認面直下より湧水することから、この土壙程度の深さでも充分その機能は達せられる。問題となるのは土壙の形状であろう。③貯蔵穴であるとすると、逆に土壙の深さに問題があり、湧水することを考え合わせれば決して貯蔵に適した条件下にあるとは言えない。いずれであったとしても、確実な物的証拠が検出されない以上推察の域を出ないが、墓壙、もしくは井戸としての機能が考えられよう。

古墳時代の和泉期の墓壙及び井戸の実態が明らかにされていない現在、即断はしかねるが、土器の出土状態が流入、もしくは投棄された状態を呈さずに、人的行為によって設置された様な状態であったことを考慮すれば、墓壙としての用途を考えるのが一番妥当性が高いと思われる。類例の増加を待って判断したい。

他の時期不明の土壙は、形態的に円形、楕円形、長方形、不整形に大別できる。

Ａ　円形……10号土壙、22号土壙、23号土壙があり、それぞれ規模に大小の差があるが、22号土壙、23号土壙は類似した形状を呈し、底面も平坦である。10号土壙は比較的掘り込みが深く底面も平坦であり、一般的な土壙のタイプである。

Ｂ　楕円形…３号土壙、11号土壙、12号土壙、15号土壙、19号土壙、21号土壙がある。19号土壙の底面には凹凸がみられ、21号土壙の底面が血状を呈する他は、底面はほぼ平坦である。そして、12号土壙は小ピットを４個有する。形状にバラツキがあり、画一性はない。

Ｃ　長方形…２号土壙、５号土壙、６号土壙、24号土、25号土壙、27号土壙がある。長方形と言

っても四隅が幾分丸みを帯びた形態で、底面プランはやや角張る形状を呈する。底面は、25号土壙の北壁が緩く立ち上る以外は、殆どが平坦面である。覆土は、黒褐色が多く、一目で同類の土壙であることが判断できた。主軸方向にこそバラツキがみられるが、形態的には画一性が強く感じられる。

D　不整形…4号土壙、7号土壙、8号土壙、9号土壙、13号土壙、14号土壙、16号土壙、17号土壙、18号土壙、20号土壙、26号土壙がある。これ等の土壙に関して一様に言えることは、底面が平坦ではないということで、甚だしい場合は9号土壙、14号土、16号土、18号土、20号土の様に凹凸が著しい。しかし、覆土は他の土壙と同様であり、特別ローム塊を多く含むというものでもなく。また、所謂ロームマウンドといわれているものも認められなかった。これ等の土壙は、形態的には一般的な土壙として理解できず、倒木痕等の性格が考えられるが、一概にそれと断定しえない性格を保有するものかもしれない。

4）溝と井戸について

1号溝は、直線的に小蛇行しながら掘られているが、建物南側調査区にその姿は現われず、建物下で方向を変えていることが考えられる。覆土中の流入と思われる須恵器小破片以外、出土遺物はなく、構築時期は不明であるが、古墳時代和泉期の1号土壙を切っていることから、それ以降に構築されたことは明確である。地境的な性格が考えられよう。

3号溝は、ローム面に浅く掘り込まれ、構築時期及び性格については全く不明で、耕作に於ける畝状を呈するが、溝であるとすればやはり3号溝と同様に地境的な性格が考えられよう。

4号溝は、内側にピット及び小土壙を抱き込む形で「」状に屈曲する。溝の外側の部分には、ピット状の遺構は検出されず、「」状の内部に集中してそれ等が検出され、その中のP3には底に扁平な石が礎石状に置かれていたことから、全体像は明らかではないが、溝とピットは対応する関連遺構としての性格が考えられよう。

ここで問題になるのは2号溝であろう。調査区中央部東西にかけて直線的に構築されている。2号溝と切り合う土壙の全てより新しく、しかもその覆土状態から最近構築されたものではないことが明らかとなっている。確認面で約1m幅を測り、深さ約1.2mの溝は、水位を落として発掘した時点でも底面から70～80cmの水位が得られる有様であった。

また、この溝と近接して南北に井戸跡1、井戸跡2が存在する。井戸跡2は幅が狭く、底を確認するまで掘り下げることは不可能であったが、あまり深くないものと推定される。また、井戸跡1は浅く、1.3m位で底になっているが、この深度でも充分水が得られるものである。2号溝及び井戸跡は、その位置関係からいって関連あるものと思われ、今回の調査では明確にし得なかったが、館跡であった可能性も充分残されているであろう。

5）出土遺物について

1号住居跡炉埋設土器は、胴部に幅広い無文帯を持ち、刻み目を施す隆帯を巡らし、胴下半部の文様帯を区画するもので、隆帯による縦長の楕円区画文が4箇所に配され、区画内外に縦位に太目の集合沈線を充塡するものである。炉の埋甕に使用されている部分は丁度胴上半部に当たり、口縁部・胴下半部から底部にかけての部分が欠損しているため、全体の器形は不明であるが、推定する

に、口縁部が緩く「く」字状に内彎し、直線的にやや窄む胴上半部を経て、緩くふくらむ胴下半部へと移行する器形になると思われる。文様帯は口縁部と胴下半部に隆帯によって区画されるものと思われる。

文様帯の取り方、隆帯上に刻み目を持ち、沈線を充塡することなどから、勝坂式の中でも後葉の様相を呈し、井戸尻編年（註２）に合わせれば、井戸尻式に比定されよう。そして、胴下半部で楕円区画文を４箇所に配する構成は、井戸尻式の中でも古い要素として考えられるが、沈線を充塡する手法は次の曾利式に近い要素とも考えられる。残存する部分から細分型式に対比することは非常に難しいが、ここではとりあえず井戸尻Ⅰ式段階に比定されるものとして考えておきたい。

１号土壙出土の土師器が古墳時代和泉期に比定されることは間違いないであろう。しかし、小型壺は内彎ぎみに短く立ち上がる口縁部に扁球形の胴部が付いたもので、口縁部は比較的薄く坩の口縁部を短くした様な感じを受け、他にあまり類例をみない器形を呈している。甕は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部が強く外反する器形で、胴部はあまり丸みを帯びていないものと思われる。内面には横位のケズリがみられ、外面にも明確ではないがケズリの痕跡が認められる。

和泉期の土器群は、まだ五領式土器の要素を残す段階、和泉式として確立する段階、鬼高式に近づく段階の大別して三段階の様相を持つというのが大方の考え方の様である。千葉県の外原遺跡（註３）では、五領Ⅲ—（和泉）—外原Ⅰ—外原Ⅱ—鬼高Ⅰという区分を行い、五領式と和泉式を区分する特徴として、新しい器種の出現はみられないが、坩、高坏等の器種が数量的に増大して、小型の台付甕が残存し、小形器台が完全に消滅する点を指摘している。そして、この考え方は県内に於いて愛后遺跡（註４）で受け継がれ、外原と同様の基準で五領式と和泉式を区分している。また、畑中遺跡（註５）では和泉式を「ごく単純に、１．五領式土器に近く、まだ和泉式土器として完成しきらない段階。２．和泉式土器として完成し、土器の形態も洗練され、斉一化する段階。３．２が崩れて、より鬼高式土器に近づく段階」と３段階に区分し、畑中遺跡２号住、４号住を「和泉３」に位置付けた。更に、大山遺跡（註６）でも同様の区分が行なわれ、その一番古い段階に大山遺跡を位置付けている。

衆生ヶ谷戸遺跡出土の小型壺は、他に比較資料が乏しいため位置付けは困難であるが、女堀遺跡１号住出土の壺形土器（註７）とは様相が異なり、坩形土器の胴部を大型化し丸みを持たせた様な器形を成し、底部付近にケズリが認められることから和泉期にあっても比較的古い段階に位置付けることが可能であると思われる。また、甕についても畑中遺跡とは形態が異なり、やはり古い様相を持つものであろう。

土器の細分に当たっては、それぞれの器種の変遷、組み合わせ、文化的諸要素を充分明らかにして、位置付けをしなければならないが、該期では遺跡数も少なく、住居跡が殆ど切り合わない状況からみて、まだ不明な点が多いと言えよう。その様な中で、衆生ヶ谷戸出土土器２例だけを以って位置付けを行なうことは難しく、ここでは、土器の出土状態が特殊なこと、和泉期に於いても比較的古い様相を持つということを指摘するだけにしておきたい。

土器の分類は、器形、文様、文様要素及びその他の属性によって体系化された型式に基づいて行なわれるべきである。しかし、本遺跡から出土した土器は細片が多く、しかも、器面の荒れが激し

くて、全体の器形、文様展開等不明瞭な点が多いため、文様、文様要素及び文様手法に基準を置き分類を行なったものである。そして、他の属性についてはそれ独自で分類基準になるものはなく、観察表に於いて表記するに止めた。

最初に、胎土について触れてみたい。ルーペにより観察したものであるが、胎土の主たる構成物質は、白色粒子、白色不透明粒子、白色針状物質、粒子・柱状・板状を呈する黒色物質、金雲母・絹雲母等の細片岩、小礫であった。これ等の物質は、量の多寡こそあるが、殆どの土器に含まれており、器面の荒れが激しいためか、小礫の存在が目立っている。そして、問題となるのは白色針状物質であり、含まれるものと含まれないものとの比は約１：５であった。

白色針状物質は須恵器研究の中で、生産地との関連で問題にされてきた（註８）のものであり、この物質はある特定の地域の土壌に限って含有されていることが明らかになりつつある。ある特定の地域とは、都幾川と越辺川に狭まれた南比企窯跡群を含む地域であって、衆生ヶ谷戸遺跡をも含む地域であることが理解される。白色針状物質が須恵器のみならず、東松山市桜山窯跡群の埴輪窯跡出土の埴輪、鳩山村泉井出土の国分寺瓦に含有され更に衆生ヶ谷戸遺跡出土の縄文式土器にも含有されているということは、南比企丘陵を中心とする地域の土壌に白色針状物質が含まれ、ある特定の時期だけに限らず、普遍的にこの土を使用して製品を作ったということになるのである。そして、逆にこのことは、白色針状物質の含まれる地域が限定されるに及んで肉限により簡単に産地を同定できるという利点を持つことになる。関係方面の研究が期待される。

グリッド出土土器は、縄文時代中期末葉の第Ⅰ群と後期初頭の第Ⅱ群に大別できた。第Ⅱ群土器は僅か２点の出土しかなく、衆生ヶ谷戸遺跡の主体となる土器群は第Ⅰ群土器であり、第１類から第５類までに細別してみた。以下順を追って説明を加えたい。

第１類土器は、口縁部文様帯と胴部文様帯を持つ加曾利Ｅ式系統の土器である。Ａ種は口縁部文様帯で隆帯による渦巻部分に当たり、Ｂ種は所謂磨消し懸垂文による胴部文様帯である。懸垂文部分の無文帯は、地文に縄文を施した後区画内を磨消すものではなく、沈線で区画した後縄文を充塡する手法を取るものである。しかし、縄文を充塡した後に区画沈線をやや太目になぞり返している場合には、充塡なのか磨消しなのか小破片では判別できない。

県内では、住居跡の切り合い関係、文様施文法等により加曾利ＥⅡ式の細分化が進められてきている。膳棚遺跡（註９）では３細分、島之上遺跡（註10）では連孤文土器、曽利式土器、文様施文手法等の関連で３細分が行なわれている。島之上遺跡での分類に依拠すれば、第１類土器は胴文が縄文充塡手法によるものであることから加部地曾利ＥⅡ式の終末段階に比定されるものであると思われる。

第２類土器は沈線で文様が描出される土器群である。Ａ種とした12は、把手の部分であり、胴部に２本沈線による大形の渦巻文を構成する。これは該期では他にあまり類例をみないもので、把手頂部から両口縁沿いに施される指頭で撫でた様な凹部分は特徴的であり、この後どの様に型式変化していくのか興味が持たれる資料である。地文としての縄文は充塡手法によるもので、この種のモチーフを持つ土器は在地的な土器ではなく、他地域からの影響下にある土器と言えよう。段階的には加曾利ＥⅢ式期に比定されるものと思われる。

C種は口縁部下に沈線を1条巡らして、口縁部無文帯を形式し、胴上半部に沈線による波状のモチーフを描き、胴下半部では「∩」状の懸垂文を配置するものである。D種はC種の胴部に相当する。胴中央部で上半部からの「∪」と下半部からの「∩」を対応させるモチーフを持つものと、間にずらすモチーフのものとがある。

加曽利EⅢ式期では両者が認められ、モチーフを対応させる例として志久遺跡4号土壙出土例（註11)、花影遺跡例（註12）等があげられるが、志久遺跡例は口縁下に1条の沈線区画を持たず，蕨手状沈線を波状間に口縁下部から底部付近まで垂下している。文様構成的には、縦構成的な効果を持っている。そして、花影遺跡例は口縁部に1条沈線を巡らしている点で本遺跡例と類似する。また、モチーフを対応させずにずらすものは、馬込遺跡12号住（註13)、裏慈恩寺東遺跡1号住（註14)、大北遺跡（註15）等にみられ、これ等は胴上半部の波状間に下からの、「∩」が深く入り込むものである。本遺跡から深く入り込むものは検出されず、胴中央部に於いて上下が分かれる様な構成をとる。加曽利EⅣ式期になると沈線描出の文様は、膳棚遺跡、西原大塚遺跡（註16)、出口島之上遺跡の様に胴上半部と下半部に分離する傾向がみられる。

また、D種bに分類した21、22は同一個体であるが、胴下半部の文様は他と同様であり、胴上半部の文様に特徴がある。胴上半部は、全体的にどの様な文様構成をとるか不明であるが、恐らく横構成の文様で「∽」状のモチーフをとり区画内部に縄文を充塡するものと思われる。類似例としては附川遺跡（註17）がある。附川遺跡例は、胴上半部のモチーフ内は無文化され、本遺跡例とは地文が反転する関係にある。胴上半部文様が下半部文様と対応せずに独自に展開する構成は大木式の影響を受けているものと思われ、槻沢遺跡（註18)、中坪遺跡（註19)、上の内貝塚（註20）等、福島県から北関東を中心とした地域に類例がみられる。

第3類土器は隆帯によって文様が描出されるもので、太目で断面がカマボコ状を呈するものと、微隆起線状で断面三角形を呈するものと、それぞれ描出する本数によって細分できる。地文に縄文を持ち、断面がカマボコ状を呈する隆帯によって文様が描出される土器は、梶山遺跡出土土器12号住（註21)、花影遺跡10号住、風早遺跡（註22)、後山遺跡（註23)、槻沢遺跡等で完形品が出土しているため、およその文様構成は理解される。また、破片では、足利遺跡（註24)、馬込遺跡12号住、中囲護台遺跡（註25)、小池麻生遺跡（註26）等にみられ、器面全体を断面カマボコ状の隆帯で文様区画する土器群は東北南部、北関東、東関東を中心とする地域に多く分布する傾向があり、膳棚遺跡、宮地遺跡（註27)、平尾遺跡（註28）等の西関東地方では、少ない傾向にある。この地域性からもこの種の土器群が大木8b～大木9式土器と関連深いものであると理解されるのであろう。

しかし、花影遺跡、風早遺跡、梶山遺跡、風早遺跡、梶山遺跡等の胴上半部で大きく渦を巻くモチーフは、関東地方に多く分布が認められ、加曽利EⅡ式期にも少なからず存在する。この種の土器群は、大木8b～9式に於ける、隆帯で大小の渦巻を連結させるモチーフを持つ土器群の影響を受けて、関東地方で成立した土器群であろうと思われる。そしてこれ等の隆帯が微隆起帯に変化することは容易に理解され、その分布が広がることもまた事実であり、太い隆帯との関連から問題となろう。

微隆起帯によって文様が描かれる土器群は、岩坪貝塚（註29）、中囲護台遺跡、小池麻生遺跡、大橋遺跡（註30）、高ケ坂遺跡（註31）、出口島之上遺跡、おんだし遺跡（註32）、新山遺跡（註33）等数多くの遺跡で検出され、加制曾利ＥⅣ式または、中期末葉として位置づけられ問題にされてきた土器群である。本遺跡出土の29の様に、口縁部に１条隆帯を巡らしその上に縄文を施文する土器は、岩坪貝塚、出口島之上遺跡等に散見され、１つの文様効果となっている。

第４類とした条線文の土器は、加曾利ＥⅢ式期の土器組成の一部分として見られるものであり、第２類、第３類土器に伴い、該期の土器群のセットを構成するものである。

以上、述べてきたことから、衆生ケ谷戸遺跡の土器群を編年的に位置づけてみると、第２類～第４類は、地域的な差により土器の様相が異なるが、段階的にみると吉井城山上部貝層及び直上出土の第３群Ｂ類～Ｆ類（註34）に比定されるもので、加曾利ＥⅢ式及びそれに続くものとされた土器群に当る。加曾利ＥⅢ式は、出口島之上遺跡で詳細に検討され、また、裏慈恩寺東遺跡では、加曾利ＥⅡ式系統の口縁部文様帯が崩れた形で残存する土器を組成に含む段階と、含まない段階とに明瞭に区分できるとされ、２細分案が指摘されている。

しかし、口縁部文様帯のモチーフは形を変えながらも両耳壺系統の土器の胴部文様となったり、かなり変形した形で加曾利Ⅲ式の終末段階まで生き残り、槻沢遺跡では加曾利ＥⅣ式の初頭段階と思われる土器の口縁部文様帯として、微隆起線によって描き出されている。

確かにキャリパー形土器に於ける直接的な口縁部文様帯の変化の方向性は、加曾利ＥⅢ式期の中頃では胴部文様帯に凌駕されてしまうが、該期の文様の手法、構成等が主に他地域の影響下にあるとすれば、あたかもそれに抵抗するかの如く、加曽利式系統のモチーフは大きく変形しながらも細々と、生き残っていくのである。しかし、一概にその有無だけでは区分の基準にはならないと思われる。他地域の影響としては、主に大木式、曾利式が考えられるが、加曾利Ｅ式系統の変遷と、大木式、曾利式のそれぞれの系統別の変遷を明らかにし、それ等の段階別の組み合せを基準として区分して行かなければならない問題であろう。

現在、加曾利ＥⅢ式を区分する明確な基準は持ち合せていないが、裏慈恩寺東遺跡１号住、ゴシン遺跡２号住（註35）、宮地遺跡２号住等と、島之上遺跡４号住とは時間差があるのは明らかであり、前者が加曽利ＥⅢ式前半期とすると、後者は、覆土に加曾利ＥⅣ式土器が混っていることから加曾利ＥⅢ式期でも末期の様相を呈しているものと判断できる。加曾利ＥⅣ式という呼称は、吉井城山第一貝塚で岡本勇氏が「加曾利ＥⅢ式につづくもの」と分類し、それを受け、杉山荘平氏が岩坪貝塚の報告の中で「加曾利ＥⅣ式と呼称できるかもしれない」としたことに始まる。以後、注目を浴びその存在の賛否が諸氏によって論じられ、その代表的なものとして堀越正行氏の論考が挙げられる（註36）。

また、戸田哲也氏は「吉井城山上部貝層（新）及び貝層直上の時期の両者を含めて加曾利Ｅ４式の段階として認識」し（註37）、更に、新旧に区分して古い部分に高ケ坂遺跡、平尾遺跡、吉井城山上部貝層（新）の太沈線による磨消し縄文土器を当て、新しい部分に仲町遺跡（註38）、吉井城厳山貝層直上の細い沈線による曲線的磨消し縄文土器を位置付け、微隆起帯による土器群が加曾利Ｅ４式新段階に多くかかわることを指摘している（註39）。笹森健一氏は、文様、文様描出法、文

様要素、口唇部形態等から詳細な検討を行い、加曾利EⅢ式とEⅣ式を分類している。しかし、現段階では該期の文様の系統性については明らかにされておらず、何を以って加曾利EⅢ式、EⅣ式とするか大枠では明らかになりつつあるが、細部に至っては依然として混沌とした状態が続いていると言えよう。

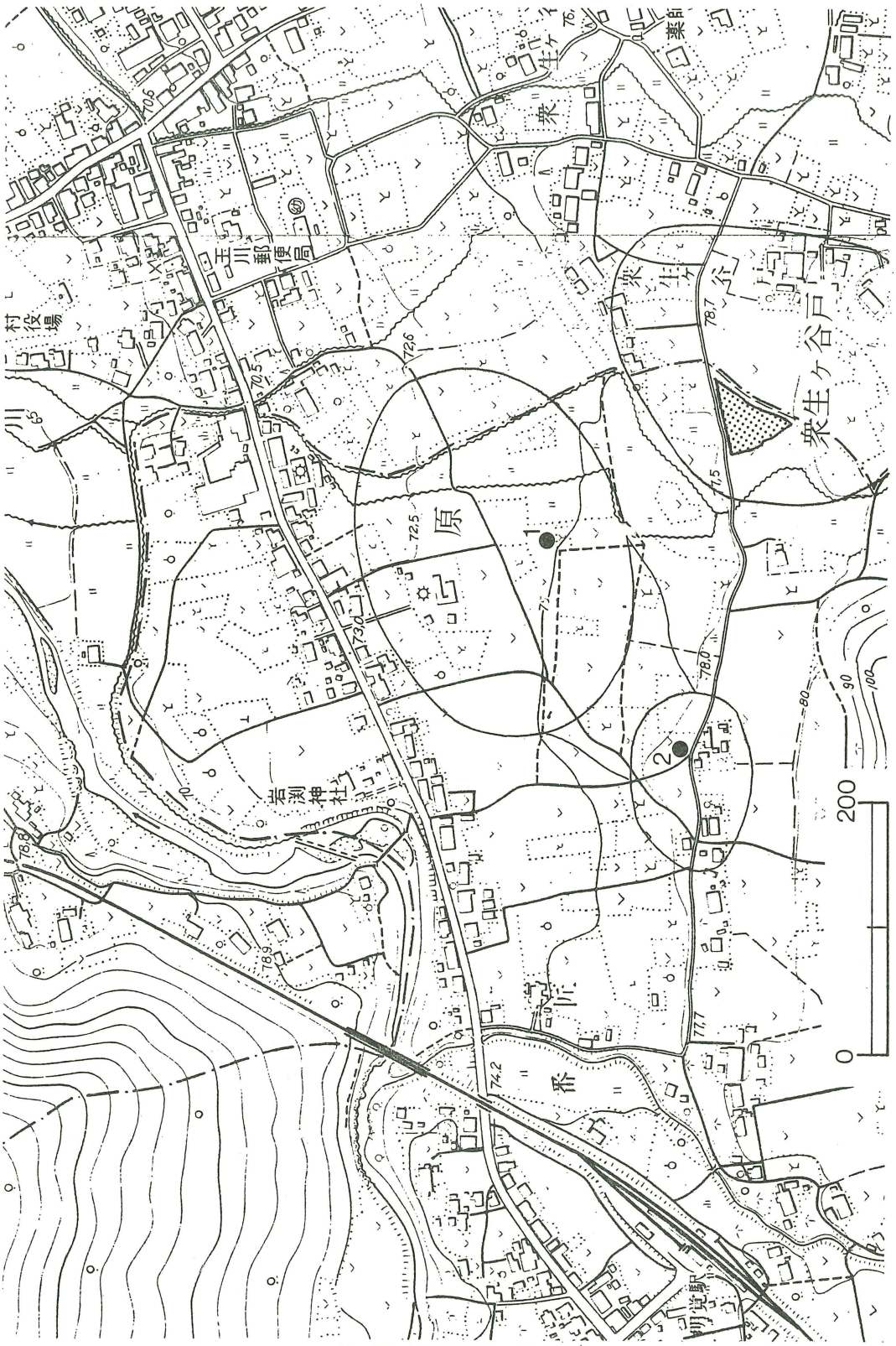
本遺跡出土土器の第Ⅰ群第1類土器を加曾利EⅡ式終末段階に比定したが、小破片であるため実態が摑めず、中には加曾利EⅢ式期の胴部文様帯の片方が含まれている可能性もある。他は大枠でいう加曾利EⅢ式後半の段階に位置付けたが、20の描出沈線は太目であるが「∩」状懸垂文の先端部の描出法が合わせ沈線であり、加曾利EⅣ式期の描出法に類似し、注目される資料である。また、微隆起帯による土器群は数点しか出土していないが、一応加曾利EⅣ式期のものとして理解される。しかし、該期の沈線系の土器が出土していないことや、細片であって全体構成が明らかでないことから、所属時期については尚慎重に検討していかなければならない問題であると思われる。

註

註1　石井寛「縄文時代における集団移動と地域組織」調査研究集録第2冊　1977
註2　藤森栄一他「中期中葉の縄文式土器群—井戸尻所収」中央公論美術出版　1965
註3　松浦宥一郎「外原」般橋市教育委員会　1672
註4　駒宮史郎他「本郷東・愛宕」埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集　埼玉県教育委員会　1976
註5　宮崎由利江他「畑中遺跡」児玉群美里村畑中遺跡調査会　1979
註6　谷井彪他「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集　埼玉県教育委員会　1979
註7　小泉功・増田逸朗「川越市女掘遺跡」埼玉考古第15号　1976
註8　笹森健一・成瀬正和他「ハケ遺跡C地区」上福岡市ハケ遺跡調査会　1979
註9　嶋崎弘文・岩井住男他「膳棚」埼玉大学考古学研究会　1970
註10　笹森健一也「前畠・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集　埼玉県教育委員会　1977
註11　笹森健一・城近憲市・並木隆「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集　1976
註12　谷井彪他「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告第3集　埼玉県教育委員会　1974
註13　早川智明・庄野靖寿他「加倉・西原・馬込・平林寺」埼玉県遺跡調査会報告書第14集　1972
註14　並木隆「裏慈恩寺東遺跡試掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告書第33集　1978
註15　小倉均「大北遺跡・井沼方遺跡発掘調査報告書」浦和市遺跡調査会報告書15　1981
註16　谷井彪他「西原・大塚遺跡発掘調査報告」志木市の文化財第4集　志木市教育委員会　1975
註17　谷井彪他「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告第5集　埼玉県教育委員会　1974
註18　海老原郁雄他「槻沢遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第34集　1980
註19　海老原郁雄「第2章縄文時代」栃木県史通史編Ⅰ　県史編さん委員会　1981
註20　鴨志田篤二・瓦吹堅他「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」日本考古学協会昭和50年度大会資料　1981
註21　神沢勇一「梶山遺跡(3)」神奈川県立博物館発掘調査報告書第4号　1970
註22　青木秀雄・福永久美子他「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会　1979
註23　土肥孝他「上尾市後山遺跡」上尾市教育委員会　1974
註24　鈴木敏昭「足利遺跡」久喜市埋蔵文化財調査報告書　久喜市教育委員会　1980
註25　江森正義・戸田哲也他「成田市中囲護台遺跡発掘調査報告」成田市遺跡調査報告第1集　1973

註26　松井義郎「小池麻生遺跡」千葉県山武群芝山町山武考古学研究会　1976
註27　城近憲市・笹森健一・並木隆・小原信子他「宮地」狭山市教育委員会　1972
註28　可児通宏・安孫子昭二「平尾遺跡調査報告書Ⅰ」南多摩郡平尾遺跡調査会　1971
註29　杉山荘平「茨城県新治郡出島村岩坪貝塚調査概報」史観第72冊　1965
註30　関根孝夫「大橋」松戸市文化財調査報告第３集　松戸市教育委員会　1971
註31　浅川利一・戸田哲也・笹村省三「町田市高ヶ坂八幡平遺跡調査報告」多摩考古10　1970
註32　井上義安他「茨城県おんだし遺跡」大洗町文化財調査報告第５集　1975
註33　井口直司・橋口尚武他「新山遺跡」東久留米市埋蔵文化調査報告第８集　新山遺跡調査会　東久留米市教育委員会　1981
註34　岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器」横須賀市博物館研究報告第７号　1963
註35　並木隆「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第35集　1978
註36　堀越正行「加曾利ＥⅢ式土器研究史」信濃24―２・３・４　1972
註37　註25による
註38　甲田真元・岩崎卓也「仲町遺跡」川崎市教育委員会　1973
註39　戸田哲也「都留市海戸遺跡出土土器と中期末編年に就て」丘陵１―３・４　1977

付　　載


村役場
三郵便局
原
1
2
亮潮神社
柴生ケ谷戸
柴生ケ
柴
柴生ケ
柴
柴
柴

Ⅰ　衆生ケ谷戸遺跡近隣の遺跡

1.　遺跡の概要

ここで述べる遺跡は、遺跡地名表都幾川村№.9に記載されている原遺跡についてである。原遺跡は、衆生ケ谷戸遺跡北側の河岸段丘で一段下った段丘面上に立地し、かなり広範囲に亘って遺物の散布が認められる。梅沢氏は、八幡遺跡の報告で原遺跡の範囲を拡張しているが、衆生ケ谷戸遺跡の調査に先だって、周辺を踏査した結果、遺物が散布する地点が何箇所か存在し、それ等が総体的に原遺跡とされていることが理解された。散布地点は、衆生ケ谷戸遺跡より下位段丘面上に位置し、その境界には、衆生ケ谷戸遺跡西側から続く小川が流れている。衆生ケ谷戸遺跡ではローム面が小川に向って北西方向に傾斜することから、小さな谷が存在すると思われたが下位段丘面にも何箇所かの埋没谷の存在が予想される。これ等の谷を境に遺跡が地点別に分かれる可能性があり、概ね遺物の散布もその様な傾向を示す。

ここに紹介する遺物は、いずれも原遺跡から出土したものである。浜野勇氏所蔵の土器は、桑畑北側の第21図№.1地点で水田耕作中に出土しており、他のものは、町道拡幅の際№.2地点で側溝部分より出土したもので、都幾川考古学会が保管していたものである。浜野氏及び都幾川考古学会岡野吉男氏に衆生ケ谷戸遺跡の関連遺跡として資料紹介の旨をお願いしたところ、両氏とも快く御諒承下さり、ここに紹介することになった次第である。

浜野氏所蔵の土器は、表面下約40㎝で耕作中に出土したものであるが、この地点は桑畑北側の水田で、原遺跡とされていた地点内に入る。しかし、№.2の地点は、№.1の地点より上位段丘面上に位置し、周辺の住宅敷地内からも遺物が出土している。この地点は、単独で1つのまとまりを示す様であるが、ここではとりあえず原遺跡の一地点として説明を加えていく。

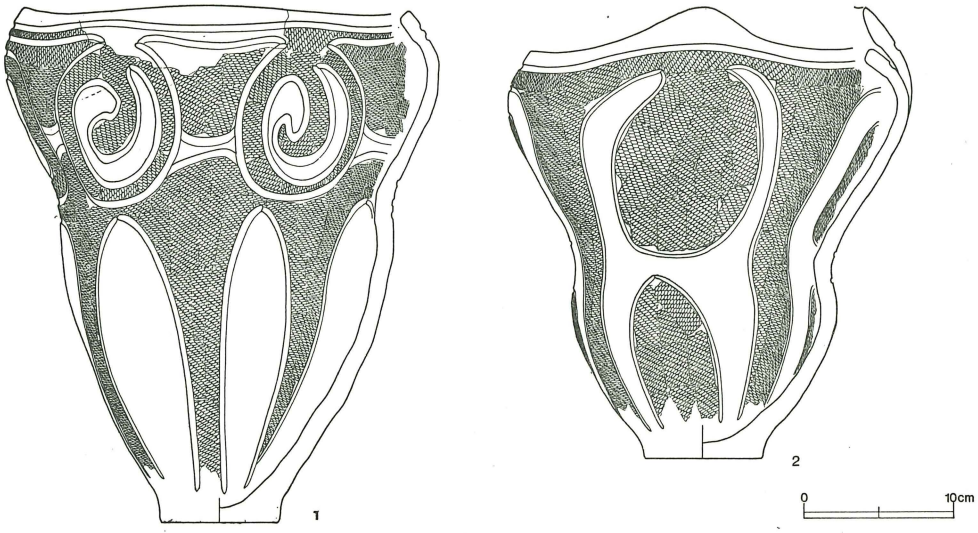
尚、№.1と№.2地点の中間部は、現在栗林、畑等になっているが、縄文式土器、石器等が僅少ではあるが散布している。周辺は水田化されている部分が多く、確認できない状況であった。

2.　出土遺物

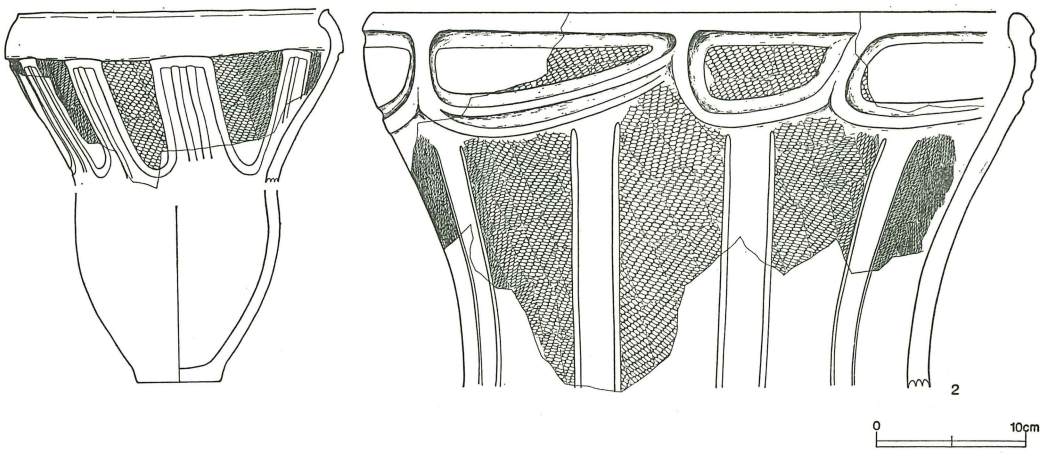
(1)　浜野氏所蔵遺物（第22図1、2）

第21図№.1の地点から、ほぼ完形で2個体出土した。2個体は約1m位間隔を置いて埋設され、2には、扁平な蓋石が置かれていたという。その際周辺からも破片が出土し、住居跡であったことは間違いなく、2個体は埋甕として埋設されていたものと思われる。

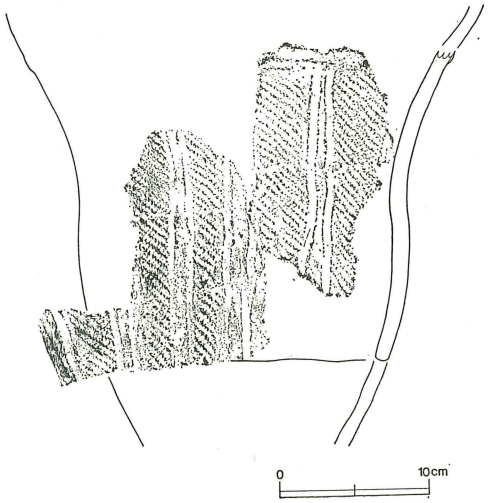
1は、口縁部が半周程損失するが、胴部はそのまま残存している。口縁が内彎し胴上半部で緩く括れ、やや膨らみを持ちながら底部へ移行するキャリパー形を呈する。口縁は残存する破片から、四単位の小波状口縁を呈すると思われるが、確かなところは不明で、平縁になる可能性もある。口径26㎝、底径8㎝、器高34.5㎝を測る。口縁形態は、楕円形にひしゃげている。文様は全て沈線で



第22図　浜野氏所蔵土器実測図



第23図　原遺跡出土土器実測図



第24図　原遺跡出土土器拓影図

区画され縄文が充塡される。口縁部に１条の沈線を巡らし口縁部無文帯を構成する。胴部文様帯は上半と下半に分かれる。上半部は、口縁部沈線下に更に１条の沈線を波状ぎみに巡らし、それが袋状に垂下して６箇所に配され、連結する。袋状に区画された部分は、２本沈線によって左右に連結され、６箇所全てが連結する構成をとる。連結する２本沈線間が無文帯になる他は、全て単節ＬＲが充塡され、口縁部は１段横位に、胴部は縦位に施文される。沈線で袋状に区画された内部に、更に沈線によって「Ｊ」字状文を区画し、無文部にしている。袋状区画と「Ｊ」字状文の間は縄文が充塡され、無文の「Ｊ」字状文とポジィティブ・ネガティブの関係になり、視覚的には、「Ｊ」字状文もしくはその変形した文様区画が、対で浮き上る様な効果を保有している。この文様構成が、基本的には６箇所に描かれるわけであるが、１箇所だけ袋状区画が狭くて細長くなっている箇所があり、ここでは「Ｊ」字状区画が変形し、全面に縄文が充塡されてポジィティブ・ネガティブの関係が崩れている。胴下半部には、裾の窄まる「∩」状懸垂文が８箇所に配される。おのおのは裾を接する部分もあり、胴上半部の袋状区画とは対応せず、独自に胴を８分割している。

２は、口縁の一部が欠損するがほぼ完形品である。口縁が内彎し、胴中央部でやや強く括れ、キャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁は平縁を呈し、１箇所山形の突起が付けられる。口径23㎝、底径８㎝、器高30㎝を測る。文様は全て沈線で描出され、口縁下に１条の沈線を巡らし、口縁部無文帯を区画している。胴部文様は、沈線によって変形した「H」字状文が描かれ、その中は無文である。他の部分は、口縁部区画沈線下で単節ＬＲを１段横位に、その下からは縦位方向に充塡している。「H」字状文の上半部は鍬形虫の鋏状を呈し、先端部で向い合う形に彎曲し、その内部は楕円形に区画され縄文が充塡される。「H」字状区画の下半部は「∩」状の懸垂文で構成され、縄文が充塡される。この「H」字状文は、把手を中心にして対応する形で４箇所に配される。

(2)　原遺跡出土土器（第23図１、２、第24〜29図）

原遺跡は前述した様に、広範囲に亘って遺物の散布が認められるが、第21図№.２の地点は遺跡の西端に当たるものであろう。この場所からは、コンテナ箱にして３箱程の遺物が採集され、中には復原できるものも存在した。土器の詳細な観察は観察表にまとめた。

第Ⅰ群土器（第25図１）

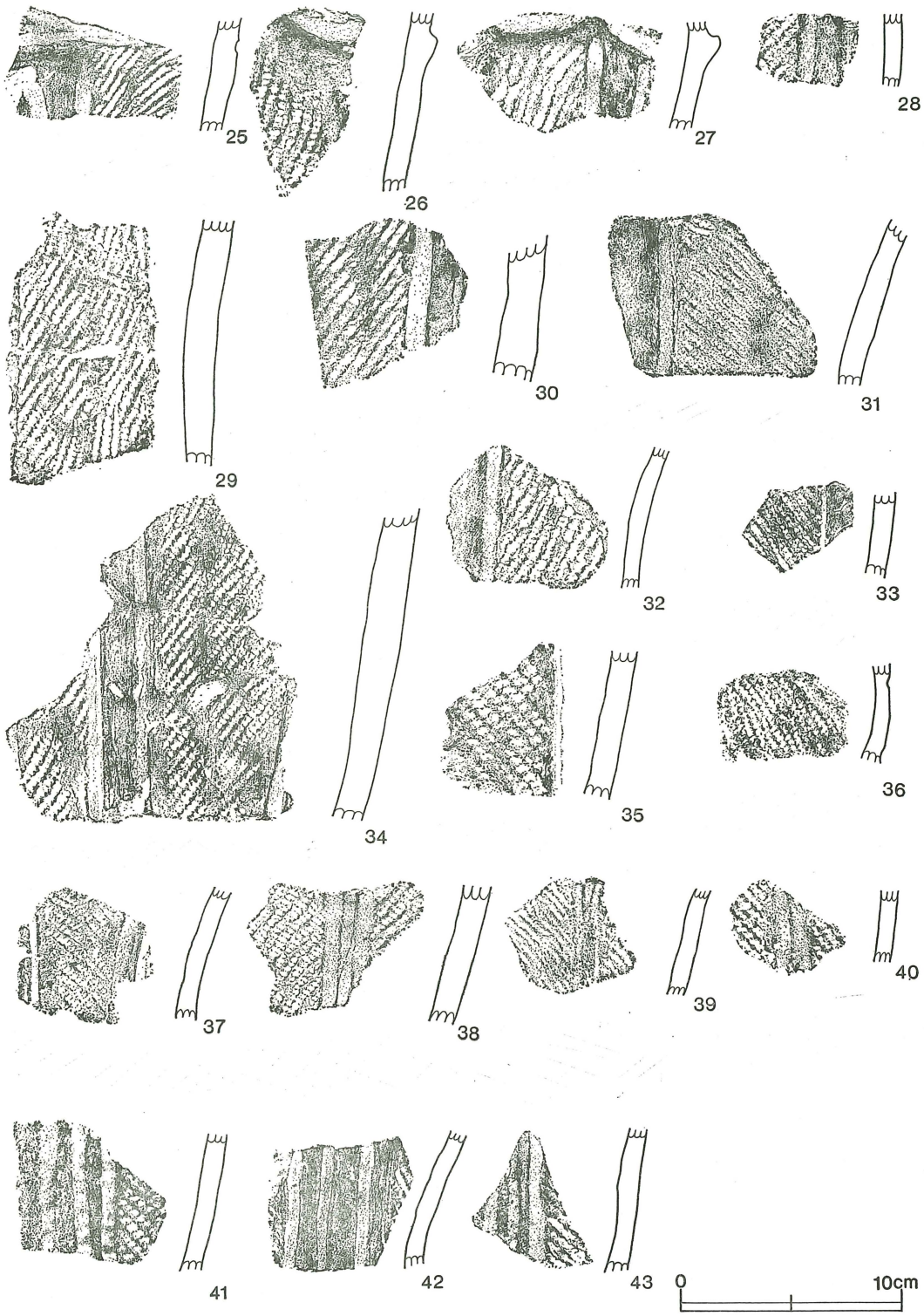
縄文時代中期中葉の土器を一括する。１は、先端に段差のつく半截竹管状工具で、押し引きながら連続して爪形文を１条施し、その下位に波状の沈線をやはり１条巡らしている。爪形文は、工具の突出部分による沈線状の効果が目立ち、一見すると二段に分けて施文された様に見えるが、幅広の工具によって１条に施文されていることがわかる。阿玉台式に比定されよう。

第Ⅱ群土器（第25図２、３）

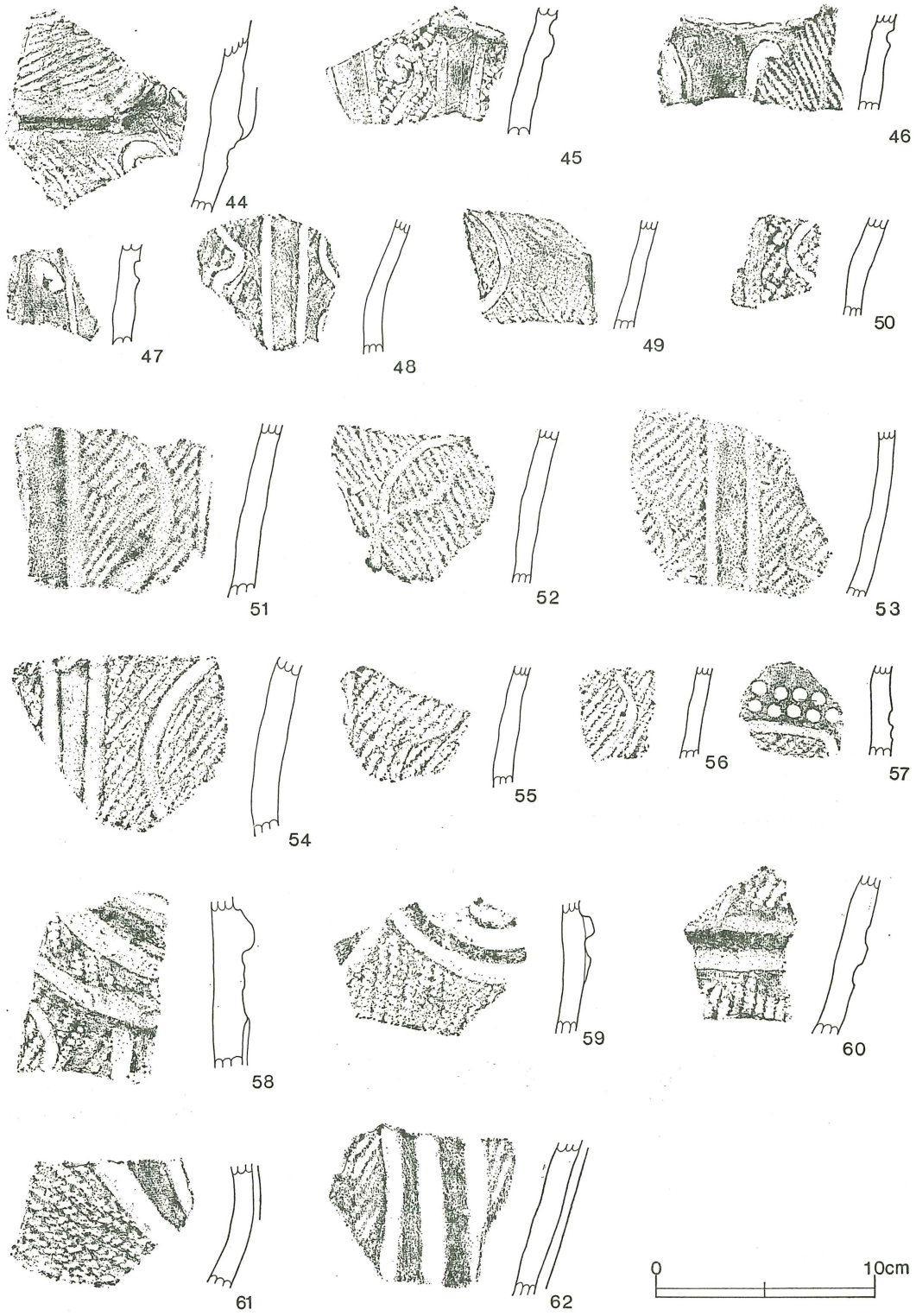
中期後半加曾利ＥⅠ式期に比定されるものを一括する。２点検出されているが、２は地文に撚糸Ｌを施文した後、断面カマボコ状の隆帯を貼付し、沈線状のなぞりを施す。３は地文に条線を施し隆帯を懸垂させ、この隆帯懸垂間を３本の沈線が弧状に連結する。この文様構成は、胴上半部で外反し、幅広の口縁部無文帯を持つ深鉢形土器にみられるものに類似する。

第Ⅲ群土器（第25図４〜24、第26〜29図）

第25図　原遺跡出土土器(1)



第26図　原遺跡出土土器(2)



第27図　原遺跡出土土器(3)

中期後葉加曾利ＥⅡ～Ⅲ式、ならびにそれと併行する土器群を一括する。

第１類（第25図４～24、第26図、第27図44～57）

加曾利Ｅ式系統で、口縁部文様帯と胴部文様帯から成るキャリパー形土器を一括する。これ等は、口縁部文様帯の渦巻文及び区画文の在り方、又、胴部文様帯の懸垂文の構成の仕方によって細分できる。

Ａ種（第25図４～15）

隆帯により渦巻文が構成され、これと対応する形で楕円形の区画文が配されるもの。

ａ、貼付隆帯が非較的高く、渦がよく巻き込まれるもの。（４、６）４はよくなぞり込まれた甲高の隆帯が「の」字状に巻き込み、連結して楕円区画がなされ、縄文が充塡される。６は、貼付隆帯による小さめの渦巻文が、口唇部付近まで持ち上げられて更に若干ひねられ、その部分からまた隆帯が垂れ下がり次の渦巻文へと連結する構成をとるものと思われる。

ｂ、低隆帯によって渦巻文が構成されるが、巻き方が崩れ集約的になっているもの。（５、７～15）５は波状口縁で渦巻文は既に楕円区画化され、単節ＲＬ施文後隆帯側をなぞりあげている。７、12、13は口唇部が内側に張り出し丸みを帯びて、やや高目の隆帯が渦を巻くものと思われる。８は隆帯で区画をした後に集合沈線が充塡される。11、14、15は渦巻文と対応して区画される楕円区画、又は、その変形した区画と思われ、内部に縄文が施文される。

ｃ、渦巻文と楕円区画という構成をとるものの、断面形態からいって口縁部文様帯とは思われず、両耳壺の胴部文様である可能性が高い。(17、18)17は渦が非較的よく巻き込まれ、なぞりによって隆帯が断面三角形状を呈する。18は器面が表裏ともよくなで込まれ、区画の内部には集合沈線が充塡される。

Ｂ種（第23図２、第24図、第25図19～24、第26図25～27）

Ａ種と明確に区分できないが、Ｂ種は、口縁部文様帯は渦巻文の崩れたもの、もしくは楕円区画化されたもので構成され、胴部文様帯は２本沈線間を無文にする懸垂文が円環的に配されるものであり、両文様帯は低隆帯もしくは沈線によって分帯される。

ａ、低隆帯によって口縁部文様帯と胴部文様帯を分帯し、隆帯脇は幅広の沈線状のなぞりが施されるもので、胴部懸垂文は口縁部区画と対応せずに独自に胴部を分帯する。（第23図２、第24図19、20、23、25～27）、第23図の２は、口縁部から胴部にかけての破片から復原実測したものである。口縁部文様帯は、横に流れる楕円区画で構成され、胴部は無文懸垂部を区画した後に縄文を施し、更に区画をなぞり返していることが切り合い関係でわかる。

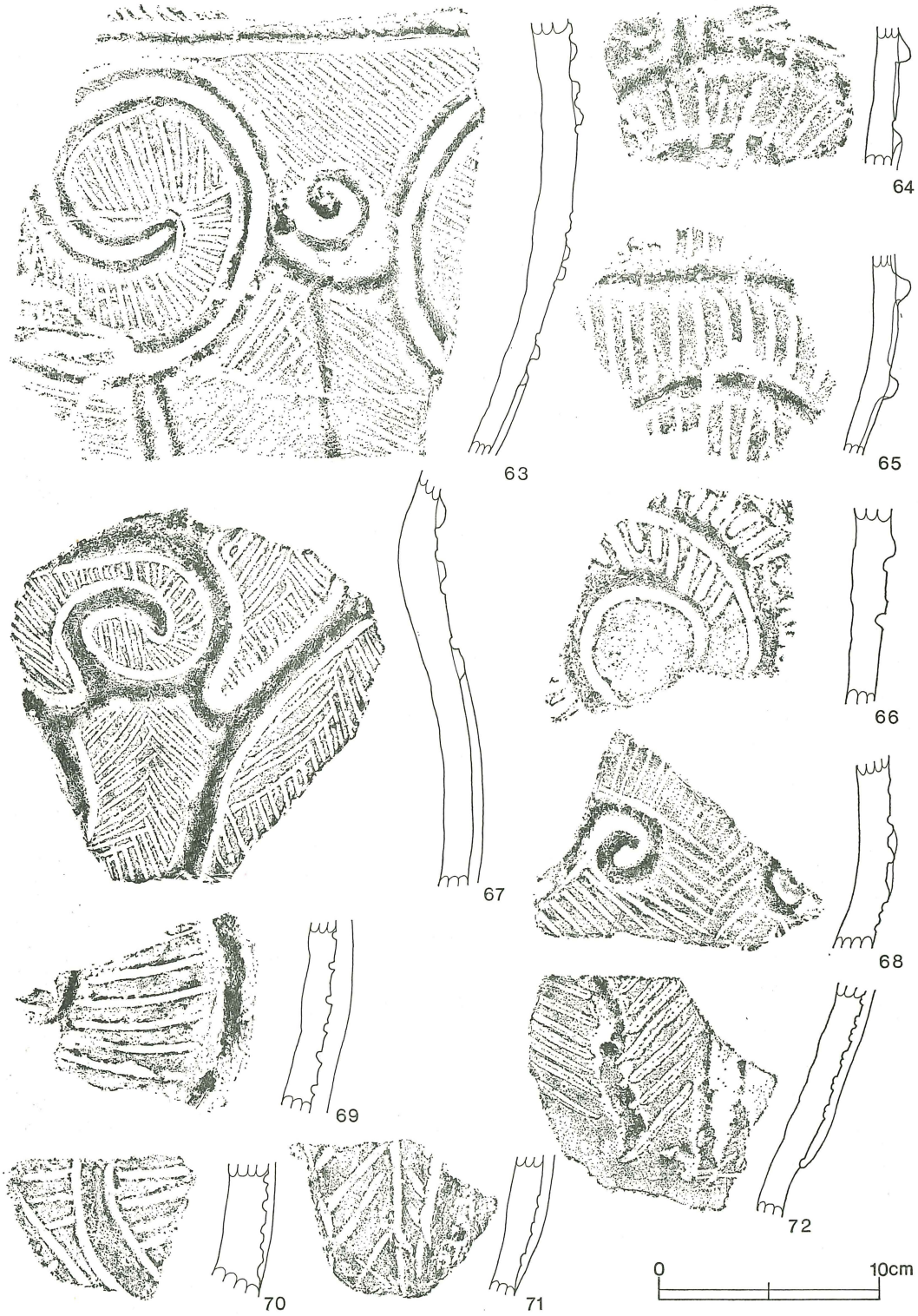
ｂ、沈線によって文様帯を上下に区画するもので、沈線の両脇の器面は僅かに盛り上る。（21、22、24）。

Ｃ種（第26図28～35、37～40）

胴部破片であり、２本沈線間を無文帯にする懸垂文で区画されるものである。

ａ、一般的な懸垂文の在り方を示すが、やはり、懸垂文区画後縄文を充塡し、最後に区画をなぞり返している。磨消縄文手法とは区別される。（28～35）33、35は複節ＬＲＬを充塡する。

ｂ、２本沈線間が狭く、無文部も狭くなっているもの。（37～40）



第28図　原遺跡出土土器(4)

D種（第26図41～43）

懸垂文が３本によって構成され、結果的に２本の無文帯が垂下する。(41～43)

E種（第27図44～56）

２本の沈線懸垂文に、蕨手状蛇行沈線文が加わって、胴部文様帯を構成するものをまとめた。

ａ、蕨手状蛇行沈線懸垂文が、縄文帯に施文されるもの。この場合、蕨手状蛇行沈線懸垂文は縄文施文後に施される。しかし、２本沈線による無文帯懸垂文と縄文との施文順位は不明であり、沈線で区画し縄文を施文して区画をなで返す工程をとると、細片では判断が難しい。ここで一括するものは、比較的縄文が整然と施文されているものもあり、磨消縄文手法によるものが多いと思われる。(44～46、48～56) 44は低隆帯で口縁部文様帯を区画するものであるが、既に楕円区画化され、口縁部文様帯を持つ土器群の中でも後出的な土器であろう。46は２本の沈線懸垂文の上端部が蕨手状になっているものである。

ｂ、２本沈線懸垂文による無文帯の内側に、蕨手状の沈線懸垂文が施文されるものである。(47)

第２類土器（第27図57）

胴部文様帯が口縁部下まで迫りあがり、所謂口縁部文様帯がなくなる深鉢形土器である。57は、沈線による「冂」状区画が口縁部下から垂下し、内部に縄文を充塡する。「冂」状区画外の無文部には、円形の刺突列が２条施される。

第３類土器（第23図１）

口縁部に幅の広い無文帯を持ち、胴部上半に沈線で横に連結するモチーフを持つもの。この類の土器は１個体分しか出土していないが、第23図の１は破片から復原したものである。口径20㎝、現存高11.4㎝を測り、現存率は約$^1/_4$程度である。口縁部に幅３㎝程の無文帯を構成し、胴部には沈線によって懸垂文状で横に連結するモチーフが区画され、単節ＲＬが施文される。このモチーフは、１本の沈線で描出され、上部では無文帯に沿って直線状に区画され、胴中央部括れの部分で「Ｕ」状になり、次の区画へと連結する。波状のモチーフであり、10単位で繰り返されている。幅の広い区画部分では２本の、狭い部分では１本の沈線が垂下する。全体的にどの様な文様展開を示すか不明であるが、胴下半部も上半部に対応するモチーフを持つものと思われる。

第４類土器（第27図58～62）

隆帯によって文様が描出されるものを一括する。

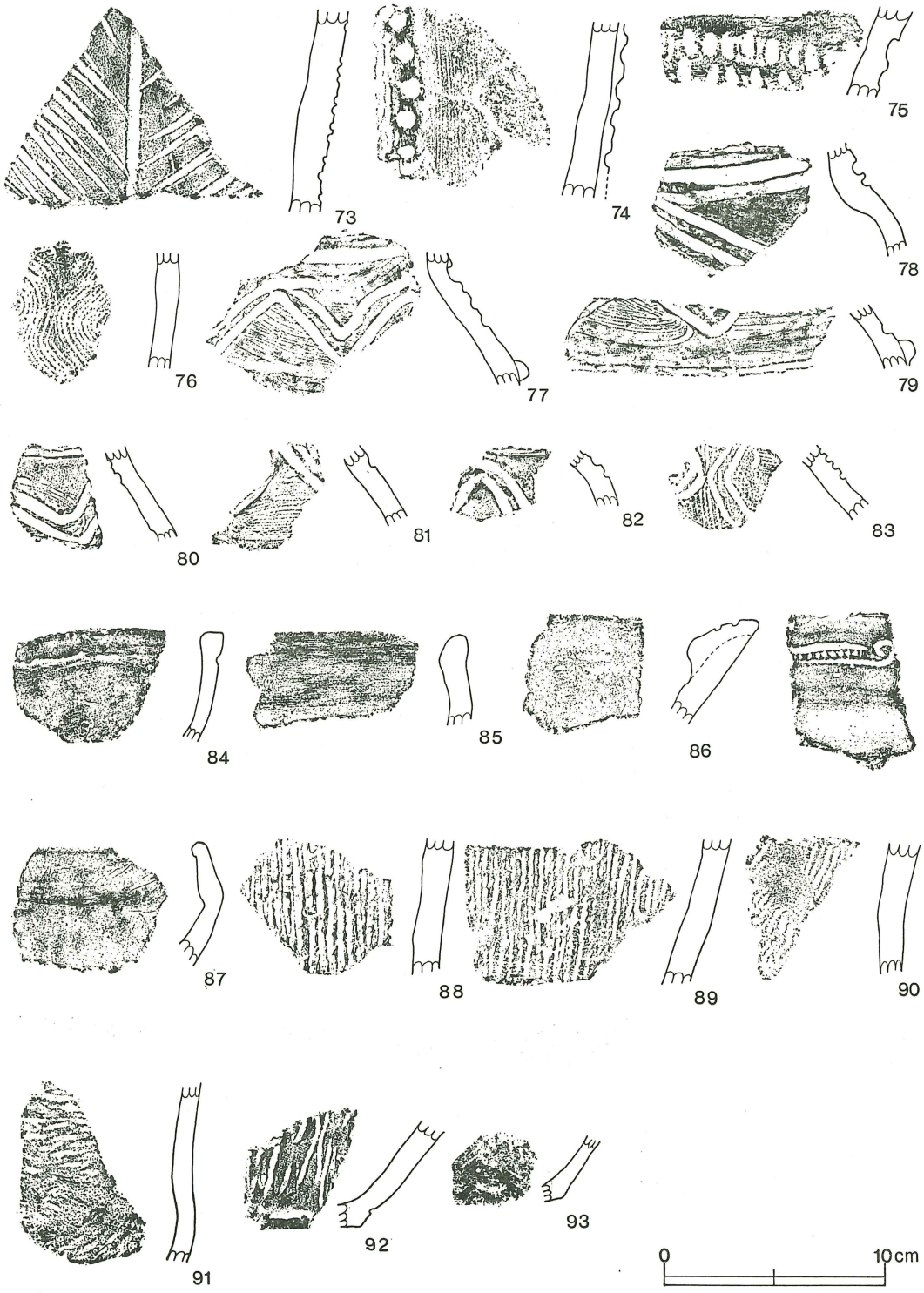
A類（58～61）

１本隆帯により渦巻状の文様が描出されるものである。隆帯脇には、比較的幅が広くて沈線的効果を有するなぞりが施される。更に、なぞりと同種の工具で、沈線文様を描出する。全体的にどの様な文様構成をとるかは不明であるが、渦巻文を基調とするものであろう。地文には縄文が施され、縄文施文後になぞりを行っている。

B種（62）

２本隆帯によって文様が描出されるものである。恐らくA種渦巻文の下に垂下するものであると思われ、隆帯貼付後、縄文を充塡している。

第５類土器（第28図63～71、第29図73～93）



第29図　原遺跡出土土器(5)

曾利式系統の土器を一括する。

A種（63～72、74）

隆帯によって文様が描かれ、主たる文様構成は大きく渦を巻き、左右に連結するものである。

a、２本隆帯によって大きな渦巻が構成されるもの。(63)63は左右の「∽」状に展開するモチーフを持つものと思われる。連結部はやはり２本隆帯が使用されるが、そのうち１本が小さく渦を巻く。渦巻文からは２本の隆帯、連結部からは１本の隆帯が垂下する。隆帯で区画された内部は、単斜方向のみの集合沈線が充塡される。施文順位は、隆帯貼付後沈線を充塡し、最後に隆帯脇になぞりを施す。

b、断面カマボコ状の１本の隆帯により大きな渦巻文が描出されるもので、中間部には沈線が充塡される。(64～66、69～72)64、65、69は同一個体と思われるが、破片であるため全体の文様がどの様な構成をとるのか不明である。１本の隆帯が巻き込むため、隆帯間の幅が狭く、２本の隆帯で巻き込んでいる様にも見える。66は隆帯脇のなぞりが深く、沈線化し隆帯と合わさって文様を描出する相乗効果を保有するものである。71、72は胴下半部～底部付近の破片である。

c、１本の隆帯で渦巻文を描出し、また、それと連結しながら、他の変形区画を構成するものであり、区画内部には異斜方向集合沈線が中央部で合わされる形で施文される。(67、68)

B種（第29図73）

沈線が垂下して文様を区画し、集合沈線を充塡するものである。

C種（第29図74、75）

頸部で屈曲して口縁部が外反する深鉢形土器である。頸部に１条の隆帯か又は刺突列を巡らして、胴部文様帯を分帯し、隆帯を垂下させる文様構成をとる。隆帯上には、押し潰した様な刺突か、刻み目が施される。74は地文に細くて浅い条線が施文されている。

第６類（第29図76）

地文に条線文のみ施文されるもの。76の１点だけであるが、櫛歯状工具によって、細く浅い条線文が、曲線的に蛇行しながら施文されている。

第７類土器（第29図77～86）

浅鉢形土器を一括する。

A種（77～83）

頸部で強く屈曲し、口縁はやや立ちぎみに外反し、胴部「＞」状屈曲部に最大径を持ち、底部へ移行する浅鉢形である。77～83は同一個体と思われるが接合する破片はない。隆帯を２条巡らして、頸部文様帯を区画し、内部に２条の沈線によって鋸歯状文を描く。地文に集合条線を施した後に、沈線で文様を描出している。

B種（84、85）

椀状に緩く立ちぎみに内彎する浅鉢である。84は口唇部に粘土を貼付して成形し、角張った口唇部形態を呈する。口縁部には貼付した部分を密着させるためになぞりが施される。85は丸みを持った口唇部がやや外反する。器面はよく磨かれ光沢を持つ。

C種（86）

皿状に口縁部が開く浅鉢である。68は口唇部が肥厚し、上面に平坦な面を作り出し、加曾利ＥⅡ式キャリパー形深鉢の口縁部文様帯と類似した渦巻文と区画文を沈線で描出している。区画文の内部には、沈線が縦方向に充塡される。

Ｄ種（87）

口縁部が「く」字状に屈曲して、内彎ぎみに立ち上がる浅鉢である。口唇部は胴部より薄くなりながら丸みを帯びるが、内側に折り返しているため若干肥厚する。

第８類土器（第25図16、第26図36、第29図88～93）

縄文のみ施文される土器群を一括する。第25図６は口縁部破片であり、口唇部はやや角張った形態を呈す。第26図36は縄文を施文し、沈線状の区画が認められるが荒れが著しく詳細は不明である。88～89はともに縄文を施文する胴部破片である。90は無文部を作り出す様に、３本撚の単節ＲＬを施文し、この無文部は文様としての効果を持つ様である。91は無節Ｌを斜位に施文する。92、93は底部破片であるが、92は撚糸Ｌを施文し、93は底部が穿孔された土器である。

表5　原遺跡出土土器観察表

番号	分類	出土地点	色調	胎土	文様要素及び施文順位 備考
1	Ⅰ群	原	F(D)E	a_2、b_2、d_3、e_3、g_1、h_3	連続爪形文、沈線文
2	Ⅰ群	原	E(C)D	a_2、b_3、c_3、e_3、h_2	Y(L)→R→N
3	Ⅱ群	原	D(C)F	a_3、b_2、d_3、e_3、g_2、h_1	X→R→N→C
4	Ⅲ群1—A—a	原	F(D)F	a_3、b_3、c_3、d_3、e_2、g_2、h_2	R→N→J(RL→)
5	1—A—b	原	D(C)F	a_2、b_2、d_3、e_3、f_3、g_3、h_1	R→N(?)→J(RL→)→N
6	1—A—a	原	J(C)J	a_1、b_2、d_3、e_3、h_2	R→N
7	1—A—b	原	C(C)F	a_3、b_2、e_3、f_3、h_1	R→J(RL→)→N
8	1—A—b	原	B(E)D	a_3、b_3、d_3、e_3、g_3、h_2	R→N→C
9	1—A—b	原	F(D)F	a_3、b_3、e_3、g_2、h_3	R→N→J(RL→)
10	1—A—b	原	C(D)C	a_3、b_2、d_3、e_3、g_3、h_1	R→N
11	1—A—b	原	F(D)F	a_1、b_2、c_3、d_3、e_3、h_1	R→N→J(RL→)
12	1—A—b	原	E(D)E	a_3、b_3、d_3、h_1	R→N→J(RL→)
13	1—A—b	原	J(C)D	a_3、b_3、c_3、e_3、h_1	R→(N?)→J(RL↓)→N
14	1—A—b	原	E(C)F	a_1、b_1、c_3、d_3、e_3、h_1	R→N→J(RL→)
15	1—A—b	原	H(H)F	a_2、b_2、d_3、e_3、f_3、h_1	R→N→J(RL→)
16	Ⅲ群8	原	B(C)D	a_3、b_3、d_3、h_1	J(RL→)
17	Ⅲ群1—A—c	原	D(C)F	a_1、b_2、d_3、e_3、h_1	R→N
18	1—A—c	原	I(B)C	a_2、b_2、d_3、e_3、h_2	R→N→X
19	1—B—a	原	F(C)F	a_2、b_1、d_3、e_3、h_1	C→J(RL↓)→C
20	1—B—a	原	C(D)F	a_2、b_2、c_3、d_3、e_2、h_1	C→J(RL↓)→N
21	1—B—b	原	D(D)F	a_2、b_1、d_3、e_3、g_3、h_1	J(LR↓)→C
22	1—B—b	原	G(F)G	a_1、b_1、d_3、e_3、h_1	J(RL→)→C
23	1—B—a	原	J(B)H	a_3、b_3、c_3、e_3、f_3、h_1	R→J→N(RL→)
24	1—B—b	原	F(C)F	a_3、b_3、c_3、d_3、e_3、h_1	J(RL→↓)→C
25	1—B—a	原	E(D)F	a_2、b_2、c_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
26	1—B—a	原	E(C)E	a_3、b_2、d_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
27	1—B—a	原	J(H)F	a_2、b_1、d_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
28	1—C—a	原	G(H)J	a_3、b_1、e_3、f_3、h_1	J(RL↓)→C
29	1—C—a	原	F(C)J	a_3、b_1、d_3、e_3、f_3、h_1	J(RL↓)→C
30	1—C—a	原	I(J)I	a_2、b_2、d_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
31	1—C—a	原	E(C)E	a_1、b_2、c_3、d_3、f_3、g_3、h_1	J(RL↓)→C
32	1—C—a	原	H(H)D	a_3、b_1、e_3、f_3、h_1	J(RL↓)→C
33	1—C—a	原	D(D)H	a_2、b_2、d_3、g_3、h_1	C→J(LRL↓)
34	1—C—a	原	F(C)J	a_3、b_2、c_3、d_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
35	1—C—a	原	J(B)C	a_1、b_2、c_3、d_3、e_3、f_3、h_1	C→J(LRL↓)
36	Ⅲ群8	原	E(B)B	a_3、b_2、c_3、e_3、f_3、h_1	C→J(?)
37	Ⅲ群1—C—b	原	B(B)B	a_3、b_3、e_3、h_1	C→J(LR↓)?
38	1—C—b	原	C(C)F	a_2、b_2、d_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
39	1—C—b	原	G(B)C	a_2、b_2、e_3、f_3、g_3、h_1	J(LR↓)→C　不明
40	1—D	原	C(B)C	a_3、b_3、d_3、e_3、h_1	J(LR↓)→C
41	1—D	原	D(B)F	a_1、b_2、c_2、d_3、e_3、g_3、h_2	J(LRL↓)→C　不明
42	1—D	原	D(C)F	a_3、b_3、d_3、e_3、h_2	C→J(LR↓)
43	1—D	原	J(D)C	a_3、b_3、d_3、e_2、f_3、h_2	J(LR↓)→C(N)
44	1—E—a	原	E(C)F	a_3、b_2、c_3、d_3、e_2、h_2	R→J(LR→↓)→C(N)
45	1—E—a	原	E(D)C	a_3、b_3、c_2、d_3、e_2、f_3、h_1	J(RL↓)→C
46	1—E—a	原	C(D)F	a_3、b_3、c_3、d_3、e_2、f_3、h_2	J(LR↓)C

番号	分類	出土地点	色調	胎土	文様要素及び施文順位 備考
47	1—E—b	原	J(D)E	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	C
48	1—E—a	原	D(C)B	a_2、b_2、c_3、d_3、e_2、g_3、h_1	J(RL↓)→C
49	1—E—a	原	J(B)F	a_1、b_3、c_3、d_3、e_3、g_3、h_2	J(LR↓)→C
50	1—E—a	原	E(C)F	a_3、b_3、c_3、d_3、e_3、g_3、h_1	J(RL↓)→C
51	1—E—a	原	I(C)J	a_2、b_1、d_3、e_2、g_3、h_1	J(RLr_3↓)→C
52	1—E—a	原	E(D)E	a_2、b_3、d_3、e_3、g_3、h_1	J(LR↓)→C
53	1—E—a	原	F(D)G	a_3、b_2、d_3、e_3、g_2、h_1	J(RL↓)→C
54	1—E—a	原	E(C)F	a_1、b_1、c_3、d_3、e_2、h_1	J(RL↓)→C
55	1—E—a	原	E(D)F	a_3、b_2、c_2、d_3、e_2、f_3、g_2、h_1	J(RL↓)→C
56	1—E—a	原	E(D)E	a_3、b_3、d_3、e_3、h_1	J(RL↓)→C
57	Ⅲ群2	原	G(F)F	a_1、b_2、d_3、e_2、g_3、h_1	J(RL↓)→C　円形刺突
58	Ⅲ群4—A	原	E(D)D	a_1、b_2、c_3、d_3、e_3、g_2、h_1	J(RL→↓)→R→N
59	4—A	原	B(D)F	a_1、b_3、c_3、d_3、e_3、g_3、h_1	R、J(LRL)、C　不明
60	4—A	原	F(F)F	a_3、b_3、d_3、e_2、h_1	R→J(RL→↓)→N
61	4—A	原	J(C)J	a_2、b_3、c_2、d_3、e_2、g_3、h_2	R→J(LRL↘)→C
62	4—B	原	H(D)J	a_3、b_2、c_2、d_3、e_3、h_2	R→J(LR)→C
63	Ⅲ群5—A—a	原	J(C)J	a_3、b_2、c_3、d_3、e_3、f_3、g_3、h_2	R→C充塡→N
64	5—A—b	原	I(I)J	a_2、b_2、d_3、e_3、g_3、h_2	R→N→C充塡
65	5—A—b	原	J(J)G	a_2、b_2、d_3、e_3、g_3、h_2	R→N→C
66	5—A—b	原	E(C)D	a_2、b_1、c_2、d_3、e_3、g_3、h_1	R→C充塡→N
67	5—A—c	原	H(E)F	a_3、b_3、d_3、e_2、f_3、g_2、h_1	R→C充塡→N
68	5—A—c	原	F(D)J	a_3、b_2、d_2、e_1、f_2、g_3、h_2	R→N→C
69	5—A—b	原	G(E)G	a_3、b_2、c_3、d_3、e_3、g_2、h_1	R→N→C
70	5—A—b	原	C(C)D	a_1、b_2、c_3、d_3、e_3、g_2、h_1	R→C→N
71	5—A—b	原	F(D)E	a_3、b_3、c_3、d_3、e_2、g_3、h_1	R→C
72	5—A—b	原	J(D)J	a_3、b_3、c_3、e_3、g_2、h_1	R→N→C
73	5—B	原	E(C)E	a_1、b_1、d_3、e_3、g_1、h_2	C→C充塡
74	5—C	原	I(D)G	a_3、b_2、d_3、e_3、h_1	R→円形刺突→N→X
75	5—C	原	D(D)E	a_1、b_2、d_3、e_3、g_3、h_1	刺突
76	Ⅲ群6	原	J(C)C	a_3、b_2、d_3、e_3、h_2	曲線X
77	Ⅲ群7—A	原	G(F)G	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	X→鋸歯状C
78	7—A	原	G(F)G	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	X→C
79	7—A	原	G(F)G	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	X→C
80	7—A	原	G(F)G	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	X→C
81	7—A	原	F(F)G	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	X→C
82	7—A	原	D(F)G	a_3、b_3、d_3、e_2、g_3、h_2	X→C
83	7—A	原	E(C)D	a_1、b_2、d_3、e_3、h_2	X→C
84	7—B	原	F(D)F	a_1、b_2、d_3、e_3、h_2	無文
85	7—B	原	B(C)C	a_3、b_3、d_3、e_3、h_2	無文
86	7—C	原	J(D)H	a_3、b_3、d_3、e_3、h_2	口縁内側C
87	7—D	原	G(E)F	a_3、b_3、c_2、d_3、e_3、h_3	無文
88	Ⅲ群8	原	C(B)F	a_2、b_2、d_3、e_3、g_3、h_2	Y(L)
89	8	原	F(E)C	a_3、b_3、d_3、e_3、h_1	Y(L)
90	8	原	D(B)D	a_1、b_3、c_3、d_3、e_3、g_3、h_3	J(RLr_3↓)無文部を作る
91	8	原	I(D)J	a_3、b_3、d_3、e_3、h_1	J(無節、L↘)
92	8	原	G(C)C	a_2、b_2、d_3、e_3、h_2	Y(L)
93	9	原	F(B)C	a_3、b_2、d_3、e_3、g_3、h_1	底部穿孔

注　原遺跡出土土器観察表の見方は、衆生ヶ谷戸遺跡のものと同様である。

Ⅱ　考　察

衆生ヶ谷遺跡の関連遺跡として、原遺跡№.１、№.２地点出土土器を検討してきた。原遺跡は、踏査した結果、広範囲に亘って地点別の遺跡が群在するのではないかと予測された。そして、№.１、№.２地点は出土土器に時間差があり、距離も離れているため、原遺跡群内にあって地点別に分かれる遺跡としての可能性が高く、出土遺物からもそれが言えよう。

ここでは、先に、№.２地点出土土器に検討を加え、次に、№.１地点出土土器に若干の考察を加えて行きたい。

№.２地点出土土器は、全て縄文時代中期に属するもので、第Ⅰ群土器が中期中葉、第Ⅱ群土器が加曾利ＥⅠ式期、第Ⅲ群土器が加曾利ＥⅡ～Ⅲ式期所産のものである。尚、第Ⅲ群土器は第１類から第７類に分類した。更に、個々の様相で細分した。以下、順を追って検討したい。

第Ⅰ群土器は、１点しか検出されなかったが、阿玉台式期の所産と思われる。細破片のため全体の様相は摑めないが、文様要素として押し引きによる連続爪形文の間隔が開き、沈線が使用されていることから、阿玉台式でも末葉的な様相を呈する。

第Ⅱ群土器は加曾利ＥⅠ式期である。３の土器は、膳棚遺跡32号住、35号住出土土器（註１）の系譜上にあると思われ、地文は異なるが同じモチーフを持つ土器が大山遺跡Ａ６号住（註２）、坂東山遺跡７号住（註３）から出土している。また、第Ⅲ群第１類に分類した６の土器も第Ⅱ群土器に含まれるものかもしれない。第Ⅰ群土器、第Ⅱ群土器を合わせても数量的には微々たるもので、№.２地点に於いて主体的な土器群ではない。

第Ⅲ群第１類土器は加曾利Ｅ式系統で、口縁部文様帯と胴部文様帯で構成される土器群である。口縁部の渦巻部と楕円区画部は連結し、５の様に渦巻部が巻ききらず、区画文と一体化する土器も含まれる。この段階の類例は、坂東山遺跡土壙出土土器、花影遺跡土壙出土土器（註４）等があるが、口縁が波状を呈する点では、花影遺跡９号住出土土器に類似する。、口縁部文様帯の崩れ方は異なるが、同段階に比定されよう。また、この低隆帯による表出法が、沈線による表出法に変化した段階に風早遺跡14号住（註５）、足利遺跡（註６）等があげられ、口縁部文様帯の簡略化が進んでいる。これ等は、同系統上に於ける一つの変化の方向性を表したものと理解できる。

第23図２の口縁部文様帯は、渦巻部と楕円区画部とが分離し、独立した横長で尻上がりに流れる様な区画で構成されている。笹森健一氏は志久遺跡の報文中（註７）で、渦巻文と区画文の連結された「二極構造」を示す土器が、６号住→１号住→４号住出土土器へと変化するという方向性を指摘している。第23図２は、志久遺跡１号住炉体土器と同段階のものと思われ、４号住炉体土器は加曾利ＥⅢ式段階のものであるということから、加曾利ＥⅡ式でも最終段階の土器であることが理解される。しかし、全ての口縁部文様帯が、この方向性で変化するとは限らず、むしろ、多様な変遷系統の中に於ける一つの変化の方向性として理解したい。例えば、風早遺跡14号住では、大型の深鉢形土器の口縁部文様帯に重層的に入り組んだ区画文が施され、小型の深鉢形土器の口縁部文様帯には単純な楕円区画文が配置されている。

また、区画内に集合沈線を充塡する土器が何点かみられ、曾利式の影響を受けているものと思われる。本遺跡17、18、椚田Ⅳ遺跡（註８）、平和台遺跡２号住（註９）、吹上遺跡27号住（註10）等にみられる様に、曾利式の影響を受けている土器は、比較的渦巻文がしっかりと巻かれる傾向にある。他の口縁部付近の破片は、区画に低隆帯や沈線を使用している点から、第23図の２と段階的には同じものと思われ、加曽利ＥⅡ式末期の様相を呈している。

胴部の懸垂文の有り方は、２本沈線間を無文帯にするものと、３本沈線間で２本の無文帯を形成するものとが存在する。谷井彪氏は、３本沈線による懸垂文は加曾利ＥⅠ式期の胴部沈線懸垂文の系譜上にあることを指摘している（註11)。本遺跡の場合、懸垂文間は比較的幅広であるがやはりその系譜上にあるものと思われる。また、胴部地文は殆どが充塡手法をとり、加曾利ＥⅡ式期でも末期の様相を呈している。他に、懸垂文間の縄文帯に蛇行沈線懸垂文を配するものがある。蛇行沈線は明らかに地文施文後施されるものであるが、懸垂文と地文の関係は不明である。この種の土器の地文が、丁寧に密に施されていて、無文帯の幅が比較的狭いことを考えれば、磨消し縄文手法をとっているものとも思われる。磨消し縄文手法であるとすれば、加曾利ＥⅡ式の中でも、今まで述べてきた土器群よりも古い様相を持つことになるが、膳棚遺跡38号住、花影遺跡９号住、及び土壙出土の土器に、蛇行沈線文が認められ、加曾利ＥⅡ式の末期にもこの存在が認められる。加曾利ＥⅢ式期では、坂東山遺跡19号住、足利遺跡等にみられる。やはり、これも、加曾利ＥⅠ式期の胴部懸垂文の系譜上にあるものと思われる。尚、３本沈線による懸垂文は、馬込遺跡12号住（註12）の加曾利Ｅ式系統で簡略化された口縁部文様帯を持つ加曾利ＥⅢ式段階の土器にも認められ、確実に加曾利ＥⅢ式期まで受け継がれる要素であることが指摘できる。

第２類土器の胴部文様帯の「冂」状区画は曾利式と関連深いと思われるが、地文に縄文を施す点は加曾利Ｅ式的な手法である。二列の列点交互刺突文は、所謂連弧文土器の口縁部又は胴部区画の交互刺突の系譜上にあるものであろうか。この種の列点文は吉井城山第一貝塚第３群土器（註13)、大蔵遺跡（註14)、平尾遺跡（註15)、谷戸遺跡（註16)、子和清水貝塚（註17）等で口縁部に施されるが、貫井遺跡（註18）等の連弧文土器では、胴部区画文としても施文されている。埼玉県に於いては宮地遺跡（註19)、後山遺跡（註20）等で出土している。

第３類土器は、復元実測のできる口縁部破片１点のみである。第23図の１は、口縁部に無文帯を構成しているが、沈線によって区画されるのが通常であり、この様に段差をつけて区画するのはあまり例がない。口縁部無文帯部分が強く内彎し、胴部が括れる器形であると思われ、文様は胴上半部に連結する波状文が施され、胴下半部もそれに対応するモチーフを持つものと思われる。胴上半部のモチーフは、直線的に垂下する懸垂文が胴中央部で弧状に彎曲し、左右に連結して10単位の変形した波状文を構成している。懸垂文内は広い部分で２本、狭い部分で１本の沈線が垂下するが、どの様な文様展開を示すか現存破片からでは不明であった。この土器のモチーフをみる限り馬込遺跡12号住、裏慈恩寺東遺跡１号住（註21)、平尾遺跡等でみられる波状沈線文とは様相が異なり、本遺跡の場合は直線的に垂下する懸垂文の左右が連結した波状文という感じを受ける。加曾利ＥⅡ式期からＥⅢ式期に変遷する過程で、突然の様に波状文を持つ土器群の出現をみるが、加曾利ＥⅡ式の土器群からは大きなギャップが感じられ、その系統性については充分解明されていないのが現

状であろう。本遺跡出土の土器が他の出土土器からみてその渦中にあることは間違いないと思われるが、その系統については慎重に検討していかなければならない問題であろう。

第４類土器は、衆生ヶ谷戸遺跡の項で述べたが、断面カマボコ状を呈する隆帯によつて渦巻を基調とするモチーフが描出されるものである。段階的には加曽利ＥⅢ式期のものと思われる。

第５類土器群は曽利式土器である。大半が所謂唐草文系の土器であり、63は、「∽」状文が左右に連結するものであり、連結部の２本隆帯の１本が更に、小さく渦を巻く構成をとる。この渦巻部や連結部から隆帯が垂下し、区画内には単斜方向及び異斜方向の沈線が中央部で合わさる様に充塡されている。米田明訓氏は、唐草文土器を中心にして、天竜川沿いの南信地区の中期後半の土器編年を考察している（註22）が、本遺跡出土の土器とは様相が異なる。また、本遺跡例は、胎土に白針状物質が含まれ、当地方で製作されたことは間違いない。類似資料は乏しいが、宮地遺跡、江光山遺跡（註23）、平山橋遺跡３号住、５号住（註24）、鶴川Ｊ地点遺跡15号住（註25）、綱島園内遺跡１号住（註26）等で出土している。宮地遺跡例より本遺跡例の方が後出的であり、曽利Ⅲ式期に比定される。また垂下する隆帯上に刺突を加え、地文に条線を施す土器群は県内では、志久遺跡、膳棚遺跡、坂東山遺跡等にみられる。これ等の曽利式土器が、加曽利ＥⅡ式期からＥⅢ式期にかけて、どの様な形で変遷し、分布して行くかが問題となろう。本遺跡に於いて、加曽利ＥⅡ式期末期の様相を持つ土器群に混って、曽利Ⅲ式土器群が検出され、都幾川村内に於いて報告はされていないが、良好な曽利式土器群が検出されている（註27）ことは、地域性及びその変遷を考える上でも重要な意味を持つと思われる。

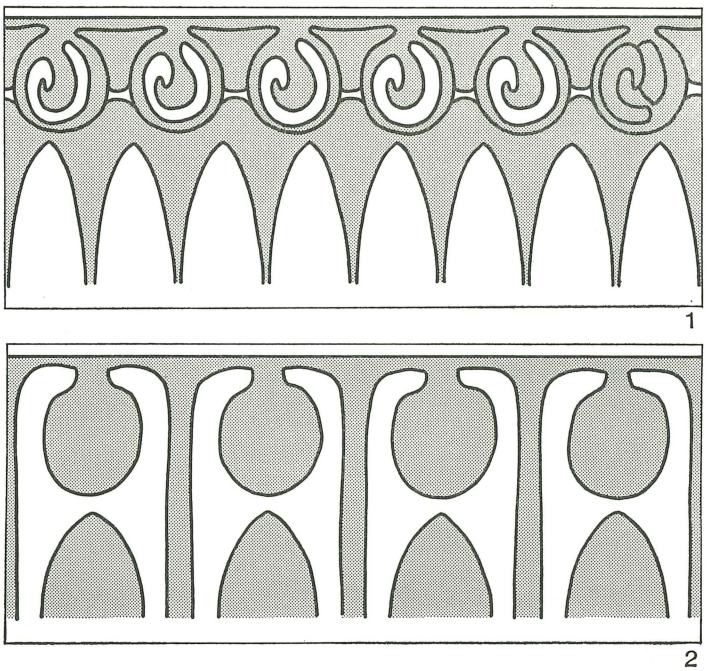
以上、原遺跡№２地点出土土器について述べてきた。これらの遺物は、道路拡幅中に検出されたもので、出土状態等不明であるが、狭い範囲から出土したことを考えれば、ある程度のまとまりを持って出土したものと思われる。そして、土器群の主体となるものは、加曽利ＥⅡ式期でも後半から加曽利ＥⅢ式期にかけてのものであることから、ここに示した土器群の幾つかを除けば、僅かな時間差に位置付けられるものと思われる。

次に原遺跡№１地点の土器を取りあげる。これは、昭和39年水田耕作中に検出されたもので、２個体は近接し正位の状態で埋められていたという。そして第22図２には蓋状に石が置かれていたといわれ、２個体は同一住居跡内の埋甕であったと思われる。

２個体の文様展開は、第30図に模式図化した。模式図であるため、個々のモチーフの大きさや胴の括れ部、底部付近のモチーフは、実際の比率と異なる。個々のモチーフを単位化して摑み、その展開の仕方を理解するためには模式図が有効的である。

第22図１の展開模式図は、第30図１である。これは、口縁部が緩やかな波状を呈し、胴上半部で緩く括れ、崩れたキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口唇部断面形態は、角のとれた角棒状を呈し、口縁部内側下部に１段稜を持つ。そして、この稜から内彎する口縁部にかけての器壁が一番薄く成形されている。

この土器は、口唇部直下に太目の沈線が１条巡らされ、幅の狭い口縁部無文帯が区画されている。その沈線の直下に、１条の沈線が楕円のモチーフを６箇所に連結し、胴上半部器面上を一周する。楕円区画文を連結する沈線は緩やかな波状を呈し、さながら袋状の楕円区画を６箇所にぶらさ



第30図　浜野氏所蔵土器展開模式図

げているかの感を受ける。更に、楕円区画は下部付近で、二本の沈線によって左右に全て連結されて一巡する。連結部の沈線は、上側下側共に彎曲し流れる様に連結される。下側の沈線と楕円区画下部の弧状沈線とが進結されて、結果的には波状沈線状になり器面を一周し、その沈線を境に胴上半部文様帯と胴下半部文様帯が分離されている。そして、楕円区画内は沈線によって自己完結する「Ｊ」字状のモチーフが描出され、その内部は無文化される。地文は単節ＬＲが、口縁部区画沈線下から、「Ｊ」字状区画文内及び楕円状区画連結沈線部を除いた部分に、全面充塡手法によって施文されている。また、胴下半部では「∩」状懸垂区画が、胴上半部の６単位の区画には対応せずに、独自で裾を合わせる様な形で８単位に構成されている。そして、地文は「∩」状区画外に施文されている。全体を見渡すと「∩」状区画内、「Ｊ」字状区画内、楕円区画連結部内が無文であり、他は全て地文としての縄文が充塡されていることになる。ここで注意しておきたいことは、胴上半部のモチーフである。視覚的には楕円区画文が強調されているが、楕円区画と楕円区画に挟まれた部分も楕円区画を連結する沈線によって独立した形で区画されていることである。つまり、胴上半部に於いては、楕円区画と台形状の区画とが対応する形で６単位ずつ配置され、器面を一周する。（以後、説明上この土器を仮に№.１の土器と称する。）

第22図２の展開模式図は、第30図２である。これは、口縁部が内彎し、胴中央部に括れがあり、小さな底部に移行する比較的ひきしまったキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部は平縁であるが、突出した把手が１箇所山形に付く。口唇部は、№.１と同様角のとれた角棒状を呈し、№.１と同様口縁内側に稜を持ち、その部分が一番薄く成形されている。

この土器は、口唇部下に太目の沈線が１条巡らされ、幅の狭い口縁部無文帯が区画されている。

そして、胴部には山形の把手を中心にして、前後左右の４箇所に変形した「H」字状文が配置されている。「H」字状文は、口縁部を区画する太目の沈線とは異なり、細くて浅い繊細な沈線によって描出され、部分的には磨滅によって沈線が消えている箇所もある。胴上半部に於けるモチーフは、「H」字状の両先端部が内側に向い合う形で彎曲し、その内側は№.１に類似した楕円状を呈する。そして胴下半部では、楕円状区画に対応する形で「∩」状区画が配置され、胴上半部から垂下する沈線と対応して「H」字状のモチーフを構成する。地文は、「H」字状に区画された外側の部分、つまり楕円区画内、「∩」状区画内、及び「H」と「H」の間に、縄文ＬＲを充填手法によって丁寧に施文している。結果的には「H」字状モチーフ内が無文になり、モチーフ自体が浮き上ってみえる。（以後、説明上この土器を仮に№.２と称する。）

№.１と№.２の相違点を明確にしておきたい。

器形…№.１は崩れたキャリパー形。№.２はひきしまったキャリパー形。

沈線…№.１はモチーフ全体が同一の太目の沈線。№.２は口縁部無文帯を区画する沈線が太い沈線で、胴部モチーフの沈線は浅くて繊細な細沈線。

モチーフ構成…№.１は、上下に胴部文様帯が分離し、上半部は横連結に展開、下半部は縦構成。№.２は、胴上半部・下半部を一貫する縦構成。口縁部無文帯を沈線で区画する点で一致。

モチーフの視覚的効果…№.１、№.２とも胴上半部に於ける楕円区画状モチーフが類似。また、胴下半部に於いて「∩」字状区画文は類似するが、区画内の地文は反転。

地文…№.１、№.２とも単節ＬＲを口縁部区画沈線下で１段横位回転、以下縦位に充填する。

以上の様に№.１、№.２を比較すると、細部に於いてはかなりの相違点が指摘できるが、縄文の充填方法、沈線の施文の仕方、土器全体から受けるイメージ等は類似している。出土状態からいっても、同一段階に位置付けられる土器であると思われ、№.１と№.２のモチーフ、及び文様構成の取り方が異なるのは、両土器の由来、換言すればその土器に至る系統が異なるためであると考えられる。

№.１は、上下に文様帯が分帯され、上半部は横に展開する構成を持ち、下半部は上半部と対応せずに独自の縦区画を構成している。しかし、下半部の「∩」状懸垂区画外に縄文を充填するため、上半部との分帯が不明瞭になっている。この胴上半部にみられるモチーフは、基本的な区画構成という点で、全面隆帯により文様が区画される土器群と類似する。風早遺跡埋甕、花影遺跡10号住、梶山遺跡12号住出土土器（註28）等は、胴上半部に渦巻文と台形状区画が隆帯によって交互に連結されている。花影遺跡例は、№.１と単位数は異なるが、渦巻文と台形状の区画が交互に連結されたモチーフ構成をとるという点で類似する。そして、区画内に縄文が密に充填されている点も、№.１の上半部の有り方と類似する。№.１とこの種の土器群とは器形等が異なり、直接的な系譜関係は認められないが、類似する点があるといえよう。

また、荒屋敷貝塚（註29）では、胴上半部に隆帯による渦巻文を持ち、胴下半部に沈線による「∩」状懸垂文を持つ土器が出土している。胴上半部と下半部は、明らかに系統の異なる文様であり、１つの土器に於いて異系統の要素が合体されているものと理解される。この土器も、胴部文様帯が上下に分離し、それぞれが独自の展開を示すという点で、№.１と同様であり、№.１の土器を理

解する上で重要な位置を占める土器と思われる。この様に胴部文様帯が上下に分離し、独自な展開をとる構成は、文様の構成、要素、手法等を含めた多様性のある要素で系統性のあるもの、異系統のものを同一個体内に於いて、並列、合体又は置換し、表現し得る可能性を構造的に保有するものであると考えられる。

次に、№.2の土器であるが「H」字状区画は、文様構成上胴部文様帯縦分割として分類できよう。№.1と比較して、明らかに文様構成の異なることは前述したが、全体的な雰囲気は類似する。「H」字状のモチーフは、荒屋敷貝塚出土の口縁部文様帯を持つ土器では胴部懸垂文としてみられる。これは、磨消し懸垂文の中央部が連結されて「H」字状のモチーフになったものである。大山遺跡A4号住でも、口縁部文様帯は持たないが、胴部懸垂文が変化したと思われる「H」字状モチーフを持つ土器が出土している。大山遺跡は、沈線によって口縁部が区画され、その下に上半部内側に丸みを持つ「H」字状モチーフが描出されている。他に「H」字状のモチーフを持つ土器群は、槻沢遺跡（註30)、羽場遺跡（註31)、上原A遺跡（註32）等の北関東から東北地方にかけての地域で多く分布する。これ等は単位数が多くなる傾向にある。№.2のモチーフの系統関係は明らかではないが、大山遺跡例は参考になる資料であろう。

それでは、№.1、№.2の土器は、次の段階へどの様に変遷するのであろうか。仮説として考えてみたい。まず、№.2の「H」字状の外側の線が中央部で上下に分かれる必要がある。縦構成としての区画は、線が上下に分かれ左右に連結すると、横構成の区画に変化する。上半部の左右に連結する部分の中央部が括れ鋸歯状に変化し、下半部の「H」字状の外側の沈線同志が連結して「∩」字状を呈すると、出口遺跡9号住出土土器（註33）のモチーフになる。出口遺跡9号住例の場合、上下に文様帯が完全に分離するが、上半部の区画単位と下半部の「∩」状区画とが上下に対応する形をとり、一見すると「H」字状としての効果を与えている。更に、出口遺跡9号住例の上半部のモチーフが、口縁部区画線と接し、一体化すると、「H」字状の外側の区画線は従来の区画線としての意味を持たなくなり、内側の楕円区画部を包み込む形をとる。内側の楕円区画は、「H」字状の内部に於ける楕円区画部が独立化したものとして理解できる。そして、下半部の「∩」状区画が対応すると、前原遺跡（註34）等で出土した土器のモチーフとなる。

№.1の土器は、次段階でどの様に変化するか見当がつかない。楕円区画内の「J」字状区画は、本来的には意味を持たないもので、文様効果（地文と空白部との関係）上付加されたものと思われる。この様に整然と区画されたモチーフが、所謂加曾利EⅣ式期に於ける胴上半部の文様へと変化するためには、かなりの変形が必要となる。しかし、上半部モチーフが横に連結し、下半部と分離されているという点で、この土器は評価されよう。モチーフは全く異なるが、文様の持つ構造が類似するものとして、附川遺跡出土土器（註35）がある。上半部モチーフは、「∽」状区画を横展開に配し、区画内を無文化する。下半部は「∩」状区画が配され、内側にもう1本沈線を入れてその内部に縄文が充塡される。これは、全体的に区画した内部を空白化し、外部に地文を密に充塡する手法である。№.1の楕円区画内にみられた地文と空白部との処理の仕方が、附川遺跡例では下半部「∩」状区画内にみられる。本来「∩」状区画内は、この手法であると空白化されるのであるが、「∩」状区画内に1本沈線を入れることで無文帯を区画し、付加沈線の内側に縄文を充塡して、全

体のバランスを保っている。文様帯を上下に分離し、それぞれ独自の構成を展開して、区画内に縄文を充填するという手法が大木式の１つの特徴とすると、№１、附川遺跡例は、構造的には大木式と類似するが、地文の関係は反転していることになる。

№２に於いて文様変遷を段階的に述べてみたが、これはあくまでも仮説であることをことわっておきたい。縦構成の文様が横構成に変化することはかなりの意識の変化が伴うであろうと考えられる。また、同段階に文様帯上下２分割、上半部横展開の土器が存在することを考えると、比較的スムーズに変化したとも考えられる。いずれにしても、現在加曾利ＥⅣ式とされている沈線文系統の土器群の中で、ある種の系統性のある土器群を除けば、文様帯を縦分割するモチーフを持つ土器群は少ない様に思われる。

今まで述べてきたことから、№１、№２はどの段階に位置づけが可能となろうか。№１の器形は、明らかに加曾利ＥⅢ式から系統のたどれる、崩れたキャリパー形を呈し、太目の沈線でモチーフが描出されている。胴上半部の文様帯は、器形の括れの部分に合わせて中央部より上に押し上げられ、在地的なイメージを受ける土器である。№２は、器形的には中央部下が括れ、引きしまったキャリパー形を呈し、沈線の使い方でも加曾利ＥⅣ式的であるといえるが、文様が縦構成という点で前出的な感じを受ける。№１、№２が編年的にどの段階に位置づけられるかは、現在のところ判断しきれないが、少なくとも出口遺跡９号住出土土器よりは前出的であり、総体的には加曾利ＥⅢ式よりも後出的であるといえよう。ここではとりあえず、加曾利ＥⅢ式と加曾利ＥⅣ式との中間的様相を持つ土器として理解しておきたい。この段階を加曾利ＥⅢ式とするかＥⅣ式とするかは、類例の増加を待って、それ等が保有する要素を系統別に分類し、その変遷過程や土器組成を明らかにして、型式区分の基準が明確になった時点で判断していかなければならない問題であろう。

註

註１　嶋崎弘之・岩井住男他「膳棚」埼玉大学考古学研究会　1970
註２　谷井彪他「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集　埼玉県教育委員会　1979
註３　谷井彪・宮崎朝雄他「坂東山」埼玉県遺跡発掘調査報告第２集　埼玉県教育委員会　1973
註４　谷井彪他「南大塚・中組・上組・鶴ヶ丘・花影」埼玉県遺跡発掘調査報告第３集　埼玉県教育委員会　1974
註５　青木秀雄・福永久美子「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会　1979
註６　鈴木敏昭他「足利遺跡」久喜市埋蔵文化財調査報告書　久喜市教育委員会　1980
註７　笹森健一・城近憲市・並木隆「志久遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第31集　1976
註８　新藤康夫他「椚田遺跡群1978年度調査概報」　1979
註９　安孫子昭二他「東京埼玉における、縄文中期後半土器の編年試案」　1980
註10　持田友宏他「吹上遺跡―第Ⅳ次調査」日野市調査会年報Ⅰ　1978
註11　谷井彪「加曾利ＥⅡ式土器の覚書」紀要５　埼玉県立博物館　1978
註12　宮崎朝雄他「加倉・西原・馬込・平林寺」東北縦貫自動車道埋蔵文化財報告書Ⅱ　埼玉県遺跡調査会報告第14集　1972
註13　岡本勇「横須賀市吉井城山第１貝塚の土器」横須賀市博物館研究報告第７号　1963
註14　栗原文蔵「大蔵遺跡」新修世田谷区史　1962
註15　可児通宏・安孫子昭二「平尾遺跡調査報告書１」南多摩郡平尾遺跡調査会　1971
註16　国学院大学久我山高等学校考古学部「東京都杉並区西田町谷戸第２遺跡第１次調査報告書」久我山考

古学小報第２編　1963
註17　松戸市教育委員会「子和清水貝塚―遺物図版編」松戸市文化財調査報告第８集　1978
註18　土井悦枝他「貫井遺跡」　1979
註19　城近憲市・笹森健一・並木隆・小原信子他「宮地」狭山市教育委員会　1972
註20　土肥孝「上尾市後山遺跡」上尾市教育委員会　1974
註21　並木隆「裏慈恩寺東遺跡試掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告書第33集　1978
註22　米田明訓「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古17の１　1980
註23　梅沢太久夫「江光山」　1930
註24　永峯光一・小田静夫・安孫子昭二他「平山橋遺跡」東京西線及び北八王子変電所遺跡調査会　1974
註25　河野実「鶴川遺跡群・Ｊ地点」東京都町田市鶴川遺跡群調査団編　1972
註26　野本孝明他「綱島園内遺跡」大田区の埋蔵文化財Ⅰ　1980
註27　岡野吉男氏の御好意により、採集資料を実見させていただいた。
註28　神沢勇一「梶山遺跡(3)」神奈川県立博物館発掘調査報告書第４号　1970
註29　種田斉吾・斎木勝他「千葉市荒屋敷貝塚」財団法人千葉県文化財センター　1978
註30　海老原郁雄他「槻沢遺跡」栃木県教育委員会　1980
註31　海老原郁雄「第２章縄文時代」栃木県史通史編Ⅰ　県史編さん委員会　1981
註32　目黒吉明他「塩沢上原Ａ遺跡」福島県文化財調査報告書第47集　1975
註33　笹森健一他「前畠・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集　1977
註34　伊藤富治夫他「前原遺跡」　1976
註35　谷井彪他「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告第５集　1974